

三島中洲



Chushu

近代

其九

Modern



二松学舎に学び中国大陸で活動した人たち

—新収の清宮宗親資料から—

三島中洲と近代 其九

二松学舎に学び中国大陸で活動した人たち

―新収の清宮宗親資料から―

目次

I はじめに

二松学舎に学び中国大陸で活動した人たち ―新収の清宮宗親資料から―

3 / 6

II 展示資料解説

7 / 81

- 1 ①三島中洲書七絶「読清宮宗親于龍興山觀月記有感、賦此寄示」横披
②三島中洲書七絶「読清宮宗親龍興山觀月記有感」絹本詩箋、及び三島復書簡
- 2 清宮宗親写真（一八九六年〈明治二九〉八月二日）
- 3 貴陽武備学堂・師範学堂における集合写真（一九〇二年〈明治三五〉）
 - ①和服姿の日本人教習たち（七月）
 - ②貴陽武備学堂における日本人教習と清国人生徒（十月）
 - ③貴陽師範学堂における日本人教習と清国人生徒（十月）
 - ④貴陽師範学堂における日本人教習たち（十月）
 - ⑤貴陽師範学堂における日本人教習と清国人生徒（十月）
- 4 写真帖「安順踏査」（一九〇八年〈明治四二〉二月）
- 5 清宮宗親が貴州省・雲南省で入手した諸家の書
- 6 安東県における二松学舎同窓生たちの記念写真（一九一〇年〈明治四三〉三月）
- 7 三島中洲撰「清宮宗親字号説」（一八九六年〈明治二九〉秋、中洲六七歳）
- 8 ①三島中洲撰「王文成公銅像記」（一九一四年〈大正三〉十一月、中洲八五歳）
②王文成公銅像
- 9 書画帖『萬花縁』（一九二八〜一九三〇年〈昭和三〜五〉）
- 10 書画帖『翰墨因縁』（一九三二年〈昭和六〉）
- 11 写真帖『滿洲事変記念写真帖』（一九三一年〈昭和六〉）
- 12 写真帖「滿洲建国」（一九三二〜三四年〈昭和七〜九〉頃）
- 13 集合写真①〜⑥ 六枚

14 満州国官吏時代の清宮宗親写真①〜⑤ 五枚

15 清宮宗親の葬儀の写真

16 清宮宗親の中華民国からの叙勲、満州国からの任命書

17 三島中洲旧蔵の水牛角製の掛花入

18 三島中洲書幅「七絶」一八九六年（明治二九）秋（中洲六七歳）

19 三島中洲書幅「七絶」明治壬寅春送清宮民卿遊清国「一九〇二年（明治三五）春（中洲七三歳）」

20 三島中洲書幅「七絶」一九〇三年（明治三六）八月（中洲七四歳）

21 三島中洲書幅「七絶」寿宴席上作「一九一七年（大正六、中洲八八歳）」

22 福島安正書幅「七言二句」波斯行」

23 李翰芬書幅「七律四首」一九〇八年（明治四二）三月

24 「諸家寄合書」朱大符・戴季陶・彭程萬・宮崎滔天等

25 樂嘉藻画「雲頂関山西面図」一九二〇年画、一九二五年題

26 羅振玉書幅「七言律詩」

27 陳宝琛書幅「春秋繁露一則」一九三二年十月

III 資料篇

IV 清宮宗親略年譜

47

凡例

- ― 本書には、二松学舎大学所蔵にかかる清宮宗親旧蔵資料、および武熊聡氏所蔵にかかる清宮宗親旧蔵資料を収録した。後者には資料番号に*を附した。
- ― 人物の呼称は通行に従い、年齢表記は旧暦の生年を起点とした数え歳による。
- ― 図版キャプション・解説・翻刻・訓読は、町泉寿郎が担当した。
- ― 本書は、二松学舎大学資料展示室の企画展「三島中洲と近代―其九―二松学舎に学び中国大陸で活動した人たち―新収の清宮宗親資料から―」（期間 2023/10/16～11/25）の展示図録を兼ねるものである。

二松学舎に学び中国大陸で活動した人たち

—新収の清宮宗親資料から—

二松学舎大学文学部教授・東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター

町 泉寿郎

はじめに

今回の企画展「三島中洲と近代 其九」は、新収の清宮宗親資料を用いて構成した。これらの貴重な資料は清宮宗親（一八七六～一九三六）のご子孫に当たる武熊氏（宗親の四男宗忠氏の御子息）のご厚意によって、今般、本学にご寄贈いただいたものである。清宮宗親は著名人とは言えないが、一八九〇年代の二松学舎に学んだのち三十年以上にわたって中国各地で日本語教師や通訳として活動した、いわゆる中国通（当時の用語では「支那通」）の典型的な人物である。企画展の趣旨説明と清宮宗親の紹介を兼ねて、ここに一文を草する。

漢学塾時代の二松学舎（一八七七～一九二八）は、近代的学校制度が未整備な明治前半期において私塾が中等教育を代替したため、上級学校に進学する者が多く、法曹・軍人・官僚・教育者・実業家・芸術家等の多様な人材を輩出した。その中には、明治後半以降、日本が東アジア近隣諸地域に勢力を拡大していく段階において、外地の職務に従事する者も少なくなかった。外地における実務者の活動については、近代東アジア交流史のなかでも未開拓な部分があり、本学でもこれまで必ずしも十分に回顧されてきたとは言えない。

清宮宗親のように長く中国大陸に滞在し、同時代中国の事情に通じた中国通といわれる人たちは、何を志向し、実際にどのように生きたのだろうか。清宮宗親の場合、著作や詩文の類はほとんど残っていない。また、武熊氏宅に残された資料は、清宮が交流をもった清末・民国時代の中国人の書画類が

大半を占め、書簡や日記などの文書類は含まれないため、清宮の動静を詳細にすることも困難である。しかしながら、残された書画類は当該期中国の書画芸術としての価値のみならず、そこに含まれる情報を整理することによって従来未知の清宮の中国での動静や人脈がある程度明らかになる点で史料の価値をもつ。更に、これらの資料は、漢学塾出身の漢学的素養をもった中国通が形成した人的交流のありかたや、過渡期の東アジア圏の文化交流の具体相を知る上でも一定の意義をもつであろう。文書類の欠落を補うものとして写真類がある程度残されており、清宮の対中国観を考察するための補助資料となることが期待できる。

本学に寄贈を受けた清宮宗親資料は約二〇〇点に及ぶものであり、今回の展示品はほんの一部に過ぎない。中国近代史を専門としない筆者の手に余る資料も少なくないが、この展示が清宮宗親のような中国通の存在に光が当たる機会となればと願うものである。

三島中洲と清國人・朝鮮人との交流

清宮宗親について紹介するに先立ち、清宮の師である三島中洲の清國人・朝鮮人らとの交流と東アジア情勢を中心とする対外認識について概観しておきたい。

三島中洲は、備中松山藩儒の山田方谷に從学したのち（一八四三～五二）、伊勢国津藩の齋藤拙堂（一七九七～一八六五）のもとに遊学（一八五二～五六）。備中松山藩に仕官して、更に江戸の昌平坂学問所に学んだ（一八五八～五九、一八六〇）。齋藤拙堂は文章家として知られるほか海防・経世に関する著作もあり、中洲は山田方谷家塾における修学時すでに齋藤拙堂の海防関係著作を抄録している。次いで、ペリーの再来航時には津から横浜まで出向いて『探辺日録』を著している。

中洲の師山田方谷も、幕末期に早くも台湾・朝鮮に対する対外強硬論を唱えたことで知られている。元来、開国論者の方谷は、藩主板倉勝静の幕政参

画を補佐して朝幕一致体制を創出するために一時的に攘夷決行を主張するが、日本が開国すると欧米の蚕食されるのを座視するのではなく、武力行使をも恐れず対外侵出することを主張した。

備中松山藩儒となった三島中洲は、一八六二年冬から翌年にかけて藩命を帯びて中国・九州諸藩を探索し『西国探索録』『鎮西觀楓詩録』を著述し、長崎では清国人林雲達と筆談して（『瓊浦筆談』）、欧米列強の侵出に苦慮する清朝の最新情報に接しようとしていた姿勢が見える。

明治維新後の中洲は、明治十年代を中心に、朝士視察団随員崔成大との筆談（一八八一年七月九日、『三島中洲崔成大筆談録』）、清国公使館参贊黄遵憲との交流（一八八一年、『日本雜事詩』をめぐりやりとり）、張滋昉との筆談（一八八二年一月）など、来日した清国人・朝鮮人との交流をもった。これらの交流は、儀礼的なやりとりには止まるものではなく、後年に比べて概して言えば率直な意見交換が見られる。

二十世紀に入って三島中洲が七十歳台の老境を迎える前後からは、宮内省御用掛を拝命したことも与って中洲の漢学界における地位に重み加わり、来日清国人から交流を求められる機会も増している。呉汝綸が教育状況視察のために訪日した際には中洲主催による歓迎会が開かれた（一九〇二年七月六日）。呉汝綸の交流圏には、野口多内（一八七六～一九四九）と小川運平（二八七七～一九三五）という二松学舎出身者がいたことも附言しておきたい。

義和団事件に際しては、中国大陸での製塩や塩貿易に意欲を持つ貴族院議員野崎武吉郎の意を帯びて野崎の側近であり中洲の門人である手島知徳が北京に派遣された時、中洲は在北京日本公使館に勤務する門人野口多内に手島の活動を扶助するよう依頼している（架蔵野口多内宛三島中洲書簡）。

日清・日露両戦役を明治期漢学者がどのように捉えたかについてはすでに研究蓄積も多いが、三島中洲の場合、幕末には非現実的に思われた対外侵出策が両戦役によって現実のものとなったことを目の当たりにして、山田方谷の対外強硬論を回顧しその遠謀に感銘を新たにしている。例えば、日露戦争

後に作った七絶の題言では次のように言っている。

先師方谷先生、生時建議幕府欲懷柔二三隣邦為附屬、以對抗欧米列國、幕吏斥為妄言。今也我占領南滿洲保護朝鮮、果如其言。先師有知慮感泣謝皇恩也。因賦此告其靈（先師方谷先生、生時、幕府に建議して二三の隣邦を懐柔して附屬と為し、以て欧米列國に対抗せんと欲するも、幕吏斥けて妄言と為す。今や我、南滿洲を占領し朝鮮を保護し、果たしてその言の如し。先師知ること有らば、まさに感泣して皇恩に謝すべきなり。因りてこれを賦してその靈に告ぐ）。

次いで、韓国併合を見据えて伊藤博文の主導により皇太子明仁の訪韓と韓国皇太子李垠の日本留学が進められると、東宮侍講の中洲も日朝両国要人の交流の場で詩文に携わる機会が増えた。一九〇九年四月二十七日の末松謙澄宅における伊藤博文臨席の雅宴では、詩文集『善隣唱和』が作られ、中洲は参加者から次韻・和韻の詩を贈られている。

一九一四年に呉汝綸の姪呉芝瑛とその夫である廉泉が来日した際にも、中洲は歓迎の宴を開き、また呉芝瑛が書写した「楞嚴經」を大正天皇・貞明皇后に献上し、廉泉と頻繁に詩を贈答するなどしている。

最晩年の中洲は、『三役三凱』（一九一六年一月序刊）という小詩集を編纂して、親しい人物に配布した。「三役三凱」とは、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦において、日本が清国、ロシア、ドイツと戦い三度も勝利したことを指す。幕末以来の対外的緊張をくぐりぬけてきた中洲らの世代にとって、対外戦争の勝利は「人生ノ至大幸福」に他ならず、親しい人物とその幸福を分かち合いたいと思うものであった。

清宮宗親の略歴―旧蔵資料の概観を兼ねて

清宮宗親は、茨城県鹿島郡夏海村の出身で、一八九三年（明治二六）に

一八歳で上京して二松学舎に入塾した。名は宗親、字は民卿、良齋と号し、後に貴州に奉職してからは貴州の一字称「黔」を用いて黔城と号した。民卿の字と良齋の号は、一八九六年（明治二九）に清宮が中洲に請うて「字号説」（**展示品7**）とともに附与されたものである。

清宮は三島中洲からの信頼が厚く、中洲が東宮侍講を拜命した一八九六年（明治二九）の七～九月に日光と塩原温泉に滞在中、清宮は老師を扶助して詩稿の整理にあたり、中洲からその功を「孔門の子夏」に比した詩を贈られた（**展示品18**）。この時期の肖像写真も残っている（**展示品2**）。

清宮は、二松学舎在塾中、後にその知遇によって関東軍の通訳官を務めることになる福島安正と面識を得ていた可能性が高い。一九〇〇年（明治三三）一月より赤坂第三連隊下士官に漢文を教授するようになり、一九〇二年（明治三五）春には貴州省貴陽府から日本人教習として招聘されて赴任している。清宮が渡清する際、三島中洲は送別詩を贈っている（**展示品19**）。

清宮が貴陽に赴任した当初の写真が複数枚残されており（**展示品3**—①⑤）、上司・同僚である情報将校として知られる高山公通（一八六七～一九四〇、総教習）・金子新太郎（一八六五～一九一一、教習）や同僚の木藤武彦の姿も確認できる。また、人類学者鳥居龍藏（一八七〇～一九五三）が中国服姿で写っているのも珍しく（**展示品3**—④⑤）、鳥居や建築家伊東忠太（一八六七～一九五四）が貴州省・雲南省の調査時に貴陽を起点とし、清宮はそこに居合わせていることが分かる。

一九〇三年（明治三六）には二月に雲南省に遊んだ。八月には王陽明大悟の地として知られる修文県龍岡山の陽明洞を高山・金子・岡山源六と共に訪ねて、洞穴壁面に文字を刻した。この時に清宮は「龍岡山観月記」を作って三島中洲に書き送り、中洲がこれに応えて七絶を作って清宮に贈った（**展示品1**）。一九〇四年（明治三七）に清宮は師範学堂の創設者于德楷と謀り、扶風山の陽明祠の傍らに中洲詩碑を建碑した。

一九〇七年（明治四〇）七月、清宮は王陽明の銅像（**展示品8**—②）を購入し、後に日本に持ち帰って三島中洲から「王文成公銅像記」（**展示品8**—①）

を撰文して贈られている。

清宮が岩原大三郎と共に日本人教習の任を終えて貴陽を離れたのは、一九〇八年（明治四一）三月のことであり、その直前にあたる旧暦の年末年始には安順巡歴の旅に出て、少数民族の村落や村人たちを写真に収めている（**展示品4**）。

六年間（足掛け八年）の貴陽滞在中に、清宮は貴州省・雲南省の著名な学者・教育者・政治家たち（呉嘉瑞、李経義、楽嘉藻、林紹年、呉魯、趙惟熙、周恭寿、于德楷、李端棻、袁開第、石廷棟、柯邵恣、余誠格、嚴雋熙、李翰芬）（**展示品23**）、倪惟欽、凌卿雲、劉郁貢ら）と交流し、数多くの書画を揮毫して贈られている（**展示品5**）。

一九〇八～一九〇九年（明治四一～四二）、清宮はしばし東京に居を構えたのち、旧友野口多内が外務省通訳官を退官すると、一九一〇年（明治四三）に満州に渡り安東県下大東溝の日中合弁による鴨緑江採木会社に勤務した。当時、安東県には数人の二松学舎同学が住んでおり、同窓会も開かれている（**展示品6**）。また、この前後の時期に清宮は旧水戸藩士武熊氏の女を娶り、一九一二年（明治四五）二月に長女安子（中洲の命名にかかる）が出生している。

次いで、福島安正（男爵・中将、**展示品22**）が関東庁都督に就任したのにもない、一九一三年（大正二）五月に関東庁都督府に通訳官となり、旅順や青島で勤務することとなった。なお、時期未詳ながら、この頃宮崎滔天ら孫文に近い人々とも交流があったらしく、その寄せ書きも残されている（**展示品24**）。

関東都督府が関東軍と関東庁に改組された後、清宮は一九二三年（大正一二）に関東軍参謀部附となって北京に転任したらしく、ここで貴州時代の旧知（周恭寿、楽嘉藻ら）との再会があった（**展示品25**）。

北伐により北京政府が崩壊した一九二八年（昭和三）以降、清宮は天津や遼東半島に滞在することが多かつたらしく、この時期に交流をもった中国人の書画もまとまって残されている。一九二八～一九三〇年にかけて諸家に依

頼して書画帖『萬花縁』（**展示品9**）を作っている。

また、一九二九年（昭和四）には、かつて三島中洲から授けられた「王文成公銅像記」（一九一四年一月撰）と「字号説」（一八九六年九月撰）を、この時期に瀋陽（奉天）に移ってきた中国の著名な学者や要人たちに示して題跋を求めている。以後も清宮が病没する直前まで、中洲撰文の二文に対する題跋を求めることが継続された。

一九三一年（昭和六）には、書画帖『翰墨因縁』（**展示品10**）が作られた。満洲事変後、満洲国が建国（一九三二年）されると、清宮は宮内府に翻訳官として勤務し、更に一九三五年（昭和一〇）康徳二には帝室大典委員会嘱託、宮内府一等翻訳官となった（**展示品16**）。だが同年に胃癌を患って一旦帰国して加療を余儀なくされる。一九三六年（昭和一一）康徳三二月二四日に再び満洲に渡り、一か月後の三月二五日に新京（現長春）の満鉄病院に六一歳で歿した。三月二六日に薦任一等に昇叙され、翌二七日に勲三位・景雲章を追贈されている。同二九日の告別式には、同学で同じく満洲帝國官吏の佐藤知恭（一八七七〜一九四四、号瞻齋）らが出席した（**展示品15**）。満洲時代の写真は比較的多く残されている（**展示品11・12・13・14**）。

後に水戸の祇園寺に葬られた（法諡大通院知宗親居士）。翌一九三七年（昭和一二）三月一四日に二松学舎において同じく前年に歿した同窓の富田健助（高知高校教授）・山田謙吉（東亜同文書院教授）とともに清宮の追悼会が開催された。清宮宗親の四男二女のうち、長男宗賢と二男宗武は共に戦死し、現在、清宮家の墓や宗親の遺品は宗親の四男宗忠氏（二〇〇五年歿）のご子孫が管理しておられる。なお、祇園寺の墓は武熊家の水戸の共有墓地に移されて墓誌のみが存することである。

以上略述したように、清宮は一九〇二年に二七歳で貴州省の日本人教習となった以来、一九三六年に満洲国宮内府の通訳官として六一歳で歿するまで、三五年に互る時間の大半を中国大陸で過ごした。その中国生活は、民間に身を置いた時期もあったが、早くから二松学舎の先輩である福島安正の知遇を得ていたことをはじめ、貴陽の教習時代の上司である高山公通・金子新太郎

等のような情報将校と活動を共にするなど、日本陸軍と関わりが深かった。清宮は軍人ではないが、中国において日本陸軍と活動した清宮のような中国通は、漢学塾時代の二松学舎出身者の一つの典型であったと言える。

師三島中洲から得た書の中でも、清宮は「字号説」と「王文成公銅像記」をとりわけ大切にされた。上質の卷子本に仕立てられ、一九二九〜一九三六年という満洲国建国の前後にあたる時期にこれを中国の学者・要人たちに示して熱心に題跋を求めている。王陽明「良知説」を骨子とした二文が、清宮の中国における活動の支えとなったことは確かである。

中国の学者たちが撰文した題跋について言えば、羅振玉と王樹枏が共に明治維新の成功に陽明学の影響があったことに言及している点が注目される。陽明学が衰退して久しい二〇世紀初頭の清末民国期の学者にとって、陽明学に対する関心は陽明学そのものではなく、陽明学が日本の明治維新の原動力になったとする見方であったことが窺われる。三島中洲が現天皇の侍講の立場にあり、中国で活動を続ける清宮が三島中洲と陽明学によって師弟関係で結ばれているという事実は、日本における陽明学が必ずしも過去のものではないことを彼らに感じ取らせるに十分であった。

（本稿は巻末・参考資料の町2021・町2023をもとに改題改稿したものである。）

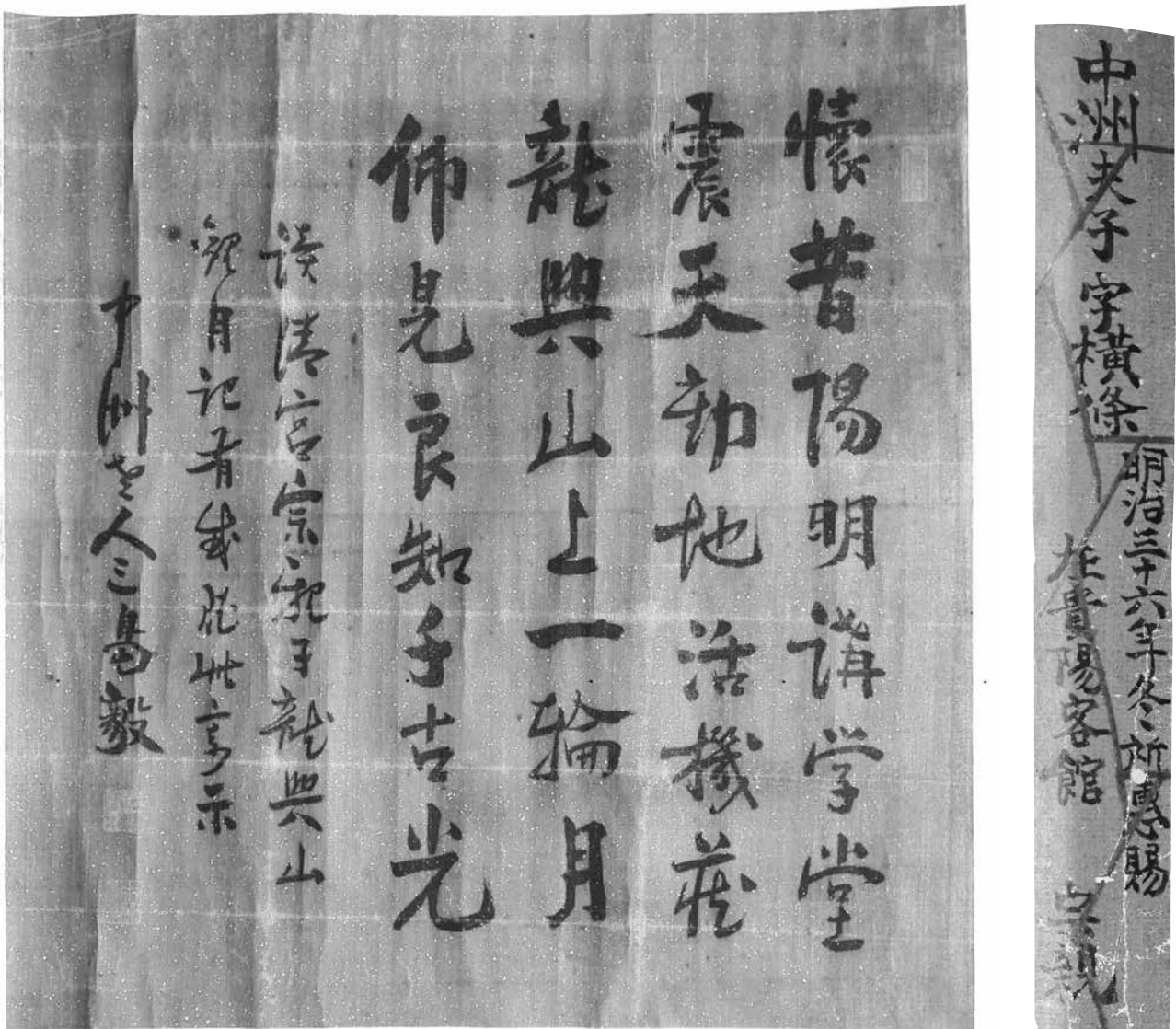
注

1 清宮宗親の事蹟に関しては、横須賀司久氏が本学図書館季報の連載をまとめた『漢詩人列伝』（五月書房、一九九七年）に「清宮黔城」が立項されている。当該文章は清宮の長女斎藤安子氏から提供された資料に基づいているため、三頁余りの簡潔な記述ながら他に見えない記事が多い。また、漢学塾二松学舎の同窓会誌である『二松学友会誌』（二八九六〜一九一九）や『中洲会誌』には、その彙報蘭にしばしば清宮の動向が記されている。中洲に送った「龍興山觀月記」のような例もあり、作詩文も嗜んだはずであるが、まとまって現存していない。

2 『三島中洲詩存』巻二・第二〇四一番詩。石川忠久編『三島中洲詩全釈』四巻、一八五頁。

3 ご子孫の武熊聡氏によれば、清宮家の戸籍謄本には宗親が歿した日付は三月二十七日となっており、位牌や墓誌も三月二十七日となっている。また、宗親の死亡届は長男宗賢が、四月二日に出しているとのことである。

II | 展示資料解説



1-① | 三島中洲書 七言絶句「読清宮宗親于龍興山観月記有感、賦此寄示」 横披 (1903年〈明治36〉)

展示品は、三島中洲が日本人教習として清国・貴州省の貴陽に滞在していた門人清宮宗親（1876～1936）から贈られた一文を読み、感興を覚えて七言絶句を作り揮毫して清宮に贈ったもの。用箋の折皺から、本書が折り畳んで郵送されたものであることを示し、遠く隔たった師弟間にしばしば書簡のやりとりがあったことを物語る。

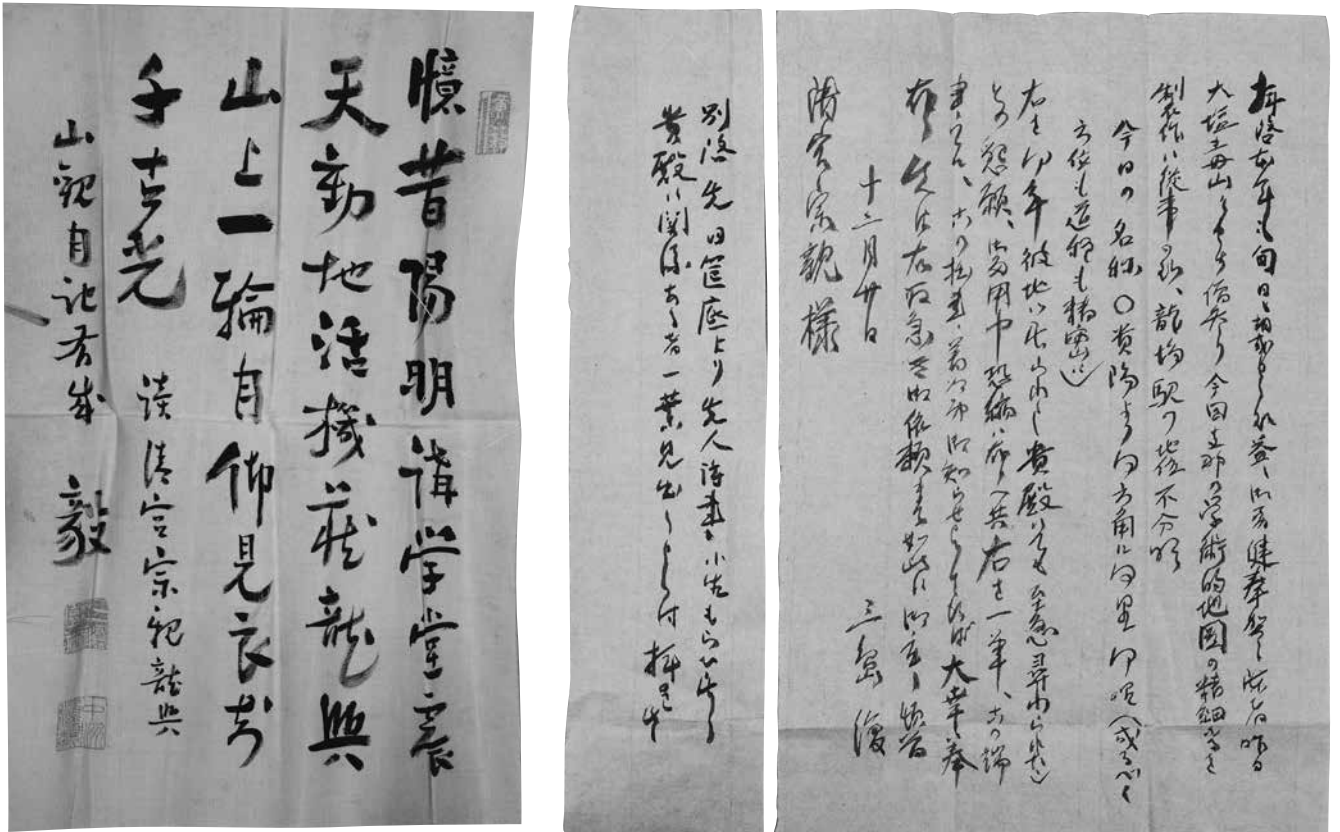
清宮は1903年（明治36）8月の夏季休暇を利用して、かつて龍場駅丞に左遷された王陽明が大悟したことで知られる修文県龍興山の陽明洞を同僚教師たち（高山公通・金子新太郎・岡山源六）と訪問し、「龍興山観月記」を作って東京の中洲に贈った。その返答として中洲が贈ったのが本詩である。中洲からこれを贈られた清宮は、中洲の詩碑の建立を思い立ち、翌1904年（明治37）に扶風山の陽明祠の傍らに建碑している。

【翻刻】 [関防印] 「黄薇人」

懐昔陽明講学堂 震天動地活機蔵 龍興山上一輪月 仰見良知千古光
読清宮宗親于龍興山観月記有感、賦此寄示。

中洲老人三島毅 [印] 「三島毅字遠叔」 「中洲漁額」

（懐ふ昔陽明講学の堂、震天動地活機蔵す。龍興山上一輪の月、仰ぎ見る良知千古の光。
清宮宗親の龍興山に月を観るの記を読んで感有り、此を賦して寄せて示す。）



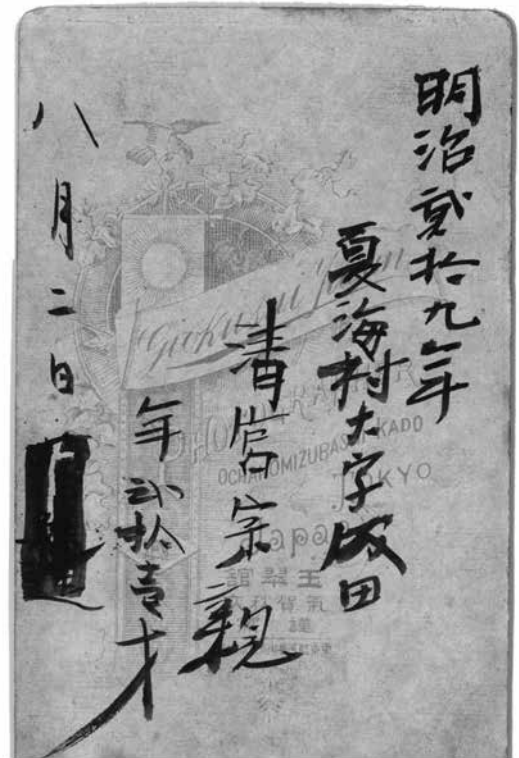
1-② 三島中洲書 七言絶句「読清宮宗親龍興山観月記有感」
絹本詩箋1枚、及び三島復書簡2紙・封筒

中洲没後、その三男三島復から清宮に対して、龍場の地理に関する質問と共に、1-①と同じ詩が書かれた絹地が贈られた。



【翻刻】 拝啓、本年も旬日と相成申候処、益々御勇健奉賀候。陳は昨日大塩毒山と申す僧参り、今回支那の学術的地図の精細なるを製作に従事の処、龍場駅の地位不分明。今日の名称、○貴陽より何方角に何里何哩（成るべく方位も道程も精密に）。右を何卒彼地に居られし貴殿にても至急尋られたしとの懇願、御多用中恐縮に存候へ共、右を一筆この端書上にこの拙書着次第御知らせ候得ば大幸に奉存候。先は右取急き御依頼まで如此に御座候。頓首。 十二月廿日 三島復 清宮宗親様
別紙、先日筐底より先人詩書、小生もらひ居り候。貴殿に関係ある者一葉見出し申候付、拝呈仕候。

(封筒) 先人書 復拝呈。



(裏面書入れ)
「明治貳拾九年
夏海村大字成田
清宮宗親
年貳拾壹才
八月二日」
「東京駿河台御茶之水橋角
玉翠館 氣賀秋畝謹写」

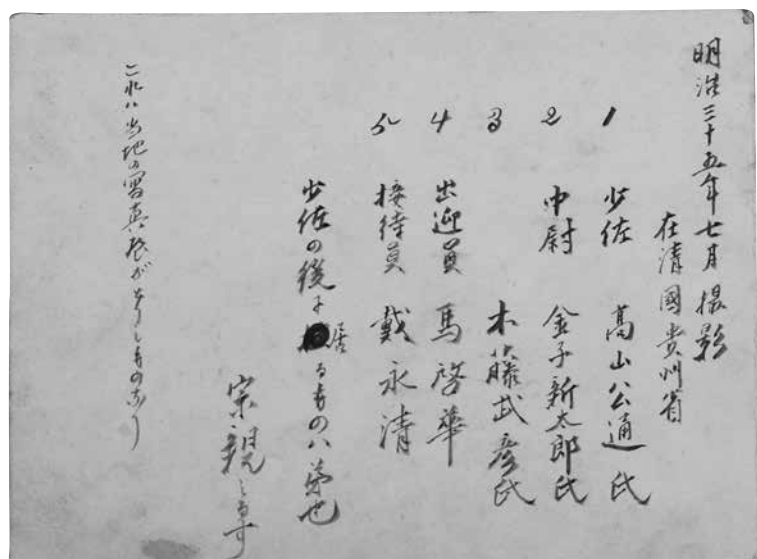
2 | 清宮宗親写真 (1896年〈明治29〉8月2日)

展示品は現存する清宮宗親の写真中最も早い時期の所影であり、この年清宮宗親は21歳。清宮は茨城県鹿島郡夏海村大字成田（現在の銚田市と大洗町の一部）の出身で、1893年（明治26）18歳で上京し、二松学舎に学んだ。清宮は三島中洲からの信任が厚く、1897年（明治30）秋から二松学舎の会計係を勤め、1899年（明治32）に助教となり、よく三島中洲の二松学舎運営を扶助した。この年（1896年）川田甕江の後任として三島中洲が東宮侍講を拝命し、同年7～9月に中洲が皇太子に従って日光・塩原に滞在した際、清宮は中洲に同行して身の回りの世話や詩文の整理などに従事した。

なお、塩原滞在中の清宮宗親は三島中洲に字・号の選定を願い出でており、中洲は王陽明の良知説にちなんで、良斎の号と民卿の字を附与している。



▲清宮宗親



(裏面書入れ)

「明治三十五年七月撮影 在清国貴州省

- 1 少佐 高山公通氏
- 2 中尉 金子新太郎氏
- 3 木藤武彦氏
- 4 出迎員馬啓華
- 5 接待員戴永清

少佐の後に居るものハ弟也

宗親しるす

これハ当地の写真屋がとりしものなり」

3 貴陽武備学堂・師範学堂における集合写真

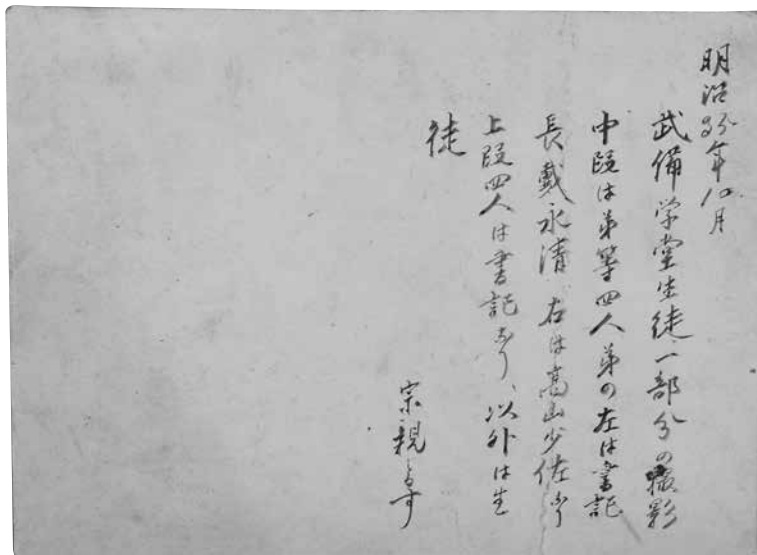
3-① | 和服姿の日本人教習たち (1902年〈明治35〉7月)

清宮は1900年(明治33)1月より陸軍下士官に漢文を教授したのち、新設された貴州省貴陽の武備学堂と師範学校で日本人教習として教鞭を執るために1902年春に渡清した。展示品は清宮が同僚の木藤武彦と貴陽に到着して間もない頃の写真で、現存する貴陽時代の写真のうち唯一和服姿のものである。右から順に木藤武彦、高山公通、清宮宗親、馬啓華(出迎員)、戴永清(接待員)、金子新太郎。高山・金子は同年3月に着任していた。



写真下部の文字

「鏡秋軒老照相館開設、黔省大西門田家巷内」



(裏面書入れ)

「明治35年10月

武備学堂生徒一部分の撮影

中段は弟等四人 弟の左は書記

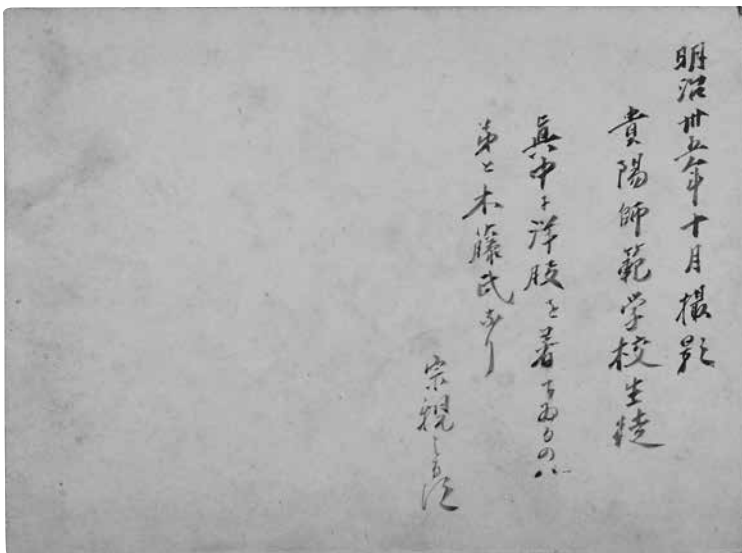
長戴永清 右は高山少佐なり

上段四人は書記なり 以外は生徒

宗親しるす」

3-② 貴陽武備学堂における日本人教習と清国人生徒 (1902年〈明治35〉10月)

前から二列目の椅子に着席している人物が教師たち。着席している人物の右側から、戴永清（武備学堂書記長）、清宮宗親、高山公通（陸軍少佐、総教習）、金子新太郎（陸軍中尉、教習）、木藤武彦。



(裏面書入れ)
 「明治卅五年十月撮影
 貴陽師範学校生徒
 真中に洋服を着てゐるものハ
 弟と木藤氏なり
 宗親しるす」

3-③ | 貴陽師範学堂における日本人教習と清国人生徒 (1902年〈明治35〉10月)

中央の着席している人物が日本人教習、右が木藤武彦、左が清宮宗親。前掲の写真3-①に比べて、少し口髭が伸びていることが確認できる。清宮は1908年(明治41)3月に離任するまで6年間在職し、貴州省・雲南省の政治家・学者たちと交流し多くの知友を得た。



▲戴永清 ▲金子新太郎 ▲高山公通 ▲鳥居龍藏 ▲馮氏 ▲木藤武彦 ▲清宮宗親

明治35年10月の写真

1. 高山少佐
 2. 金子中尉
 3. 鳥居龍藏氏 東京大学校の助手、文部省から派遣せられた人なり
 4. 木藤君
 5. 鳥居氏の通譯馮氏なり
 6. 学校の書記長
 7. 弟なり

宗親しるす

(裏面書入れ)

「明治35年10月の写真

- 1, 高山少佐
- 2, 金子中尉
- 3, 鳥居龍藏氏 東京大学校の助手、文部省から派遣せられた人なり
- 4, 木藤君
- 5, 鳥居氏の通譯馮氏なり
- 6, 学校の書記長
- 7, 弟なり

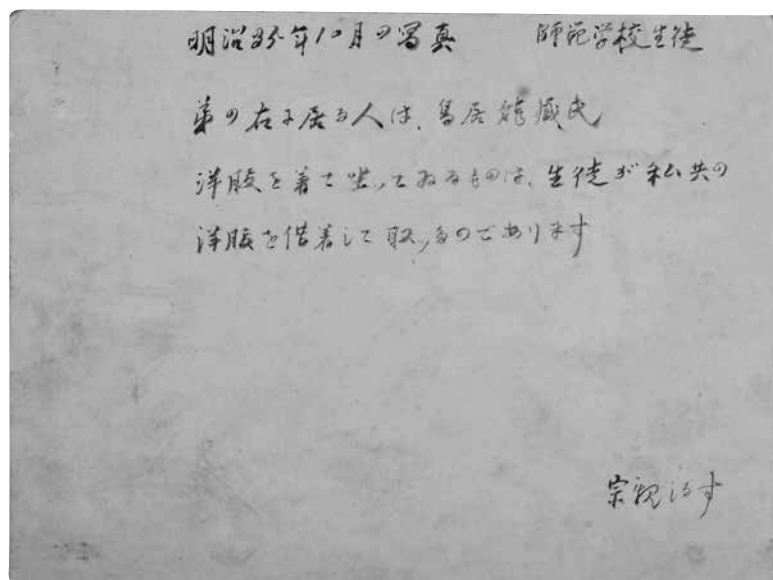
宗親しるす」

3-④ 貴陽師範学堂における日本人教習たち (1902年〈明治35〉10月)

貴州省・雲南省の少数民族調査のために現地入りした（貴陽には10月17日到着）人類学者鳥居龍藏が中国服を身につけて写っているのが珍しい。翌1903年（明治36）には建築家伊東忠太も建築物調査のために訪れている（『伊東忠太建築文献』6巻「支那旅行談其の五」）。



2列目 ▲木藤武彦 ▲金子新太郎 ▲高山公通 ▲鳥居龍蔵 ▲清宮宗親



(裏面書入れ)

「明治35年10月の写真 師範学校生徒
 弟の右に居る人は、鳥居龍蔵氏
 洋服を着て坐つてゐるものは、生徒が私共の
 洋服を借用して取つたのであります
 宗親しるす」

3-⑤ 貴陽師範学堂における日本人教習と清国人生徒(1902年(明治35)10月)

中央右より清宮宗親、鳥居龍蔵、高山公通、金子新太郎、木藤武彦。

前列左右の洋服を着て地面に座っている生徒について、清宮が彼ら日本人教習の洋服を借用して写っていると記していることから、師弟間に親密な関係があったことを窺わせる。

明治四拾年二月二十日大晦日啟程遊歷安順之旅裝



於貴陽西門外頭橋攝之

苗青人作小家于坝溪董



4 | 写真帖〔安順踏査〕（1908年〈明治41〉2月）後列右端が清宮宗親

清宮宗親は貴陽での教習生活を終えて帰国する直前の1907年（明治40）の旧暦大晦日（1908年2月1日）に貴陽を離れて安順の遊歴に出かけた。展示品は、その時に清宮が撮影した写真を収めた写真帖。少数民族の村落や村人たちを多く撮影している。写真撮影者が同行していたらしく、しばしば清宮自身の姿も写っている。

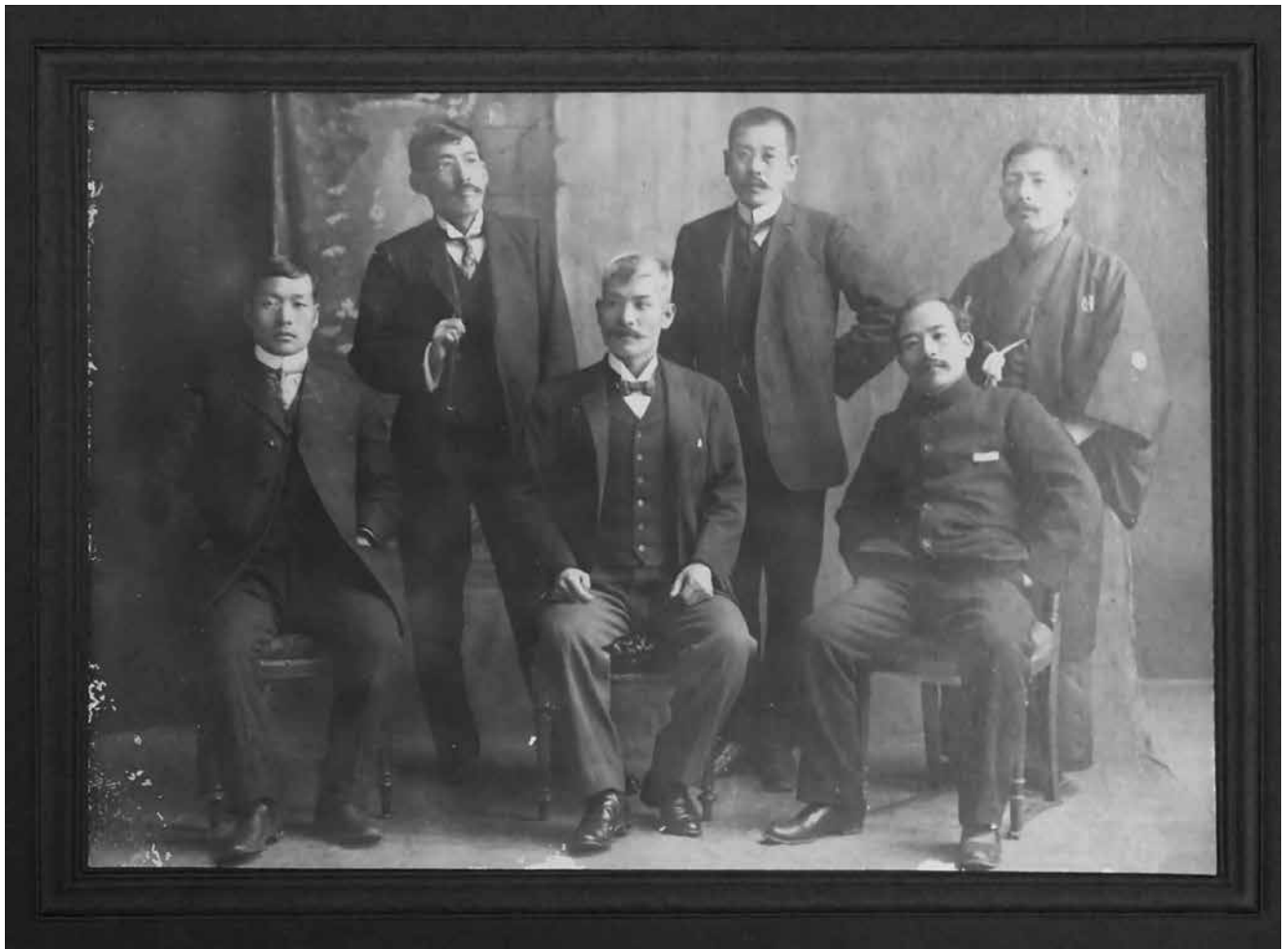


(向かって右から) ①吳嘉瑞、②林紹年、③吳魯、④林紹年、⑤李泌園、⑥李泌園、⑦趙惟熙、
⑧趙惟熙、⑨高山公通、⑩李經義、⑪于德楷ら

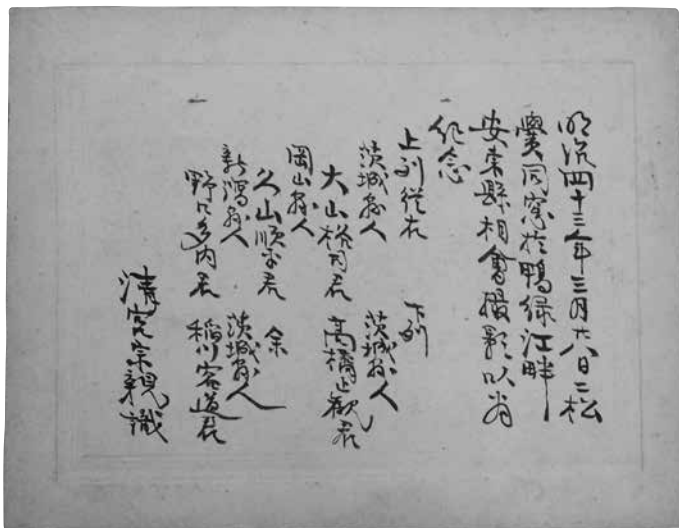
5 | 清宮宗親が貴州省・雲南省で入手した諸家の書

貴陽に滞在した6年間、清宮宗親は貴州・雲南の各地に遊び積極的に人々と交流した。書画を贈られた清人に次の人々がいる。吳嘉瑞（貴州知府）、李經義（1857～1925、貴州巡撫）、樂嘉藻（貴陽師範学堂創設）、林紹年（1845～1916、雲貴総督）、吳魯（雲南学政）、趙惟熙（貴州学政）、周恭寿（1876～1950）、于德楷（師範学堂創設者）、李端棻（1833～1907、号苾園）、袁開第（貴州布政使）、石廷棟（岳常澧道）、柯邵恣（1850～1933）、余誠格（1856～1926）、嚴雋熙（貴州按察使）、李翰芬、倪惟欽、凌卿雲、劉郁貢、包坤中。

- ① 題簽「翰林編修貴州知府吳嘉瑞字幅 明治卅五年秋貴州扶風山之会席上揮灑 清宮黔城」
- ② 題簽「雲貴総督署理林紹年字 明治三十六年二月游雲南自請得之 黔城 [清宮]」
- ③ 題簽「雲南学政使吳魯字 癸卯（1903）旧正月游滇親請得之 黔城識」
- ④ 題簽「雲貴総督署理林紹年書額 癸卯（1903）之春游曆到雲南得之」
- ⑤ 題簽「前礼部尚書李泌園对聯 左」
- ⑥ 題簽「前礼部尚書李泌園对聯 右 明治卅七年在貴州省城自請得之」
- ⑦ 題簽「貴州学台趙氏聯 右」
- ⑧ 題簽「貴州学台趙氏聯 左」
- ⑨ 題簽「高山中佐筆 玩江舟中執筆、托孫璣寄贈 卅七年四月」
- ⑩ 題簽「(前缺) □□避暑於 (歛) 壬寅秋八月 清宮黔城」
- ⑪ 題簽「貴州紳士送別之書 明治四十二年裝潢 宗親識」



稲川寄道 野口多内 清宮宗親 久山順平 高橋止観 大山格司



(裏面書入れ)

「明治四十三年三月廿八日二松
 贊同窓於鴨緑江畔
 安東県相会 撮影以為
 記念

上列従右 茨城県人 大山格司君
 岡山県人 久山順平君
 新潟県人 野口多内君
 下列 茨城県人 高橋止観君
 余
 茨城県人 稲川寄道君
 清宮宗親識」

6 | 安東県における二松学舎同窓生たちの記念写真 (1910年〈明治43〉3月28日)

二松学舎における清宮と同年・同学の親しい友人に野口多内 (1876～1949、号三山、越後新発田出身) がいる。野口は二松学舎に学んだ後、外務省の派遣留学生として北京に遊学し、保定・蓮池書院において呉如綸に学びつつ日本語を講じ、その後、北京・福州・安東の公使館・領事館に勤務した。野口はこの年、13年間勤めた外務省通訳官を退任し、安東県大東溝の日清合弁会社・鴨緑江採木会社の嘱託となり、また新聞「満鮮日報」を創業する。清宮もこれに呼応して渡満し鴨緑江採木会社に勤務した。当時、安東県には二松学舎出身者の実業家やジャーナリストが少なからず住んでいたことがわかる。

字號說

丙申秋余挈門生清宮宗親遊
 浴于塩原温泉一日宗親問其
 字號余曰宗族固可親次之不可
 不親衆民取之古本大學親民請
 字曰民卿而親民之本在明々徳
 明德即良知也請號曰良齋因
 顧塩溪曰此地噴靈泉浴石
 疾又奇巖名瀑以療瘖人墨
 客烟霞疾巨石大木以供建
 築之用姬魚石斑魚以供割烹
 之具豈非山水自然之良知哉
 然往古人不知之妄棄於空
 山絶谷之間猶人不知已有良
 知自暴自棄者近時世人稍
 知之來遊者不絶迹亦猶少發
 良知之能明德之光然不過

7 | 三島中洲撰「清宮宗親字號說」(1896年(明治29)秋、中洲67歳)

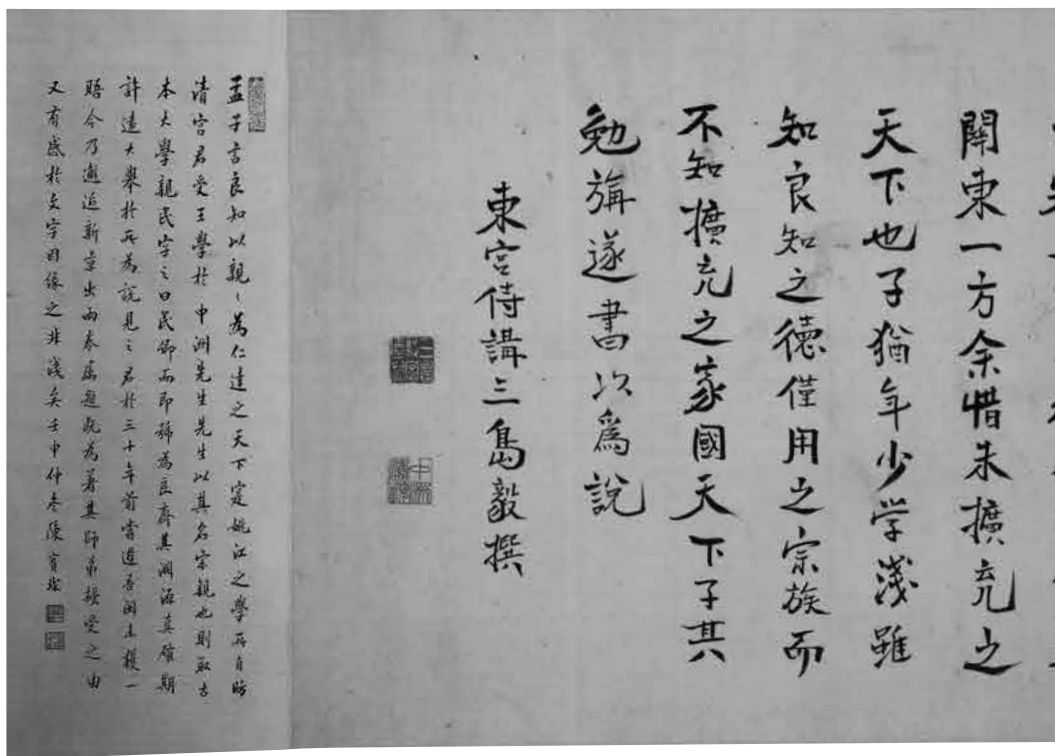
1896年(明治29)秋、塩原温泉滞在中の三島中洲は清宮宗親から「字號」を求められて、王陽明『古本大学』の「親民」から取って字を「民卿」、また「親民」は「明明徳」に基づき「明德=良知」であるから号を「良齋」と命じた。そして清宮宗親に対して「親民」を宗族に用いるだけでなく天下国家に拡充するよう努めることを求めた。清宮は中洲から贈られた「字號說」を次に掲げる「王文成公銅像記」とともに大切に保存するだけでなく、中国まで持参して卷子本に装丁し、1929年(昭和4)以降、新京、瀋陽、青島など各地で知り合った中国の著名な学者たちにこれを示して熱心に題跋を求めた。題跋を寄せた中国人は、満州国の高官たちが少なからず含まれており、関東軍の通訳官として活動した清宮の足跡を知り、また日中文化交流を跡付ける資料として貴重である。なお、「字號說」「王文成公銅像記」両卷子の題簽は、劉希淹(1906~1938、字叔文、劉廷琛の三男)が揮毫している。

諸家の題跋：三島中洲の字號說(②)の前に恭親王の題記、以下、次の題跋が続く。

- | | |
|-----------------------|--------------------|
| ①恭親王(1930年〈宣統庚午〉夏至日) | ③陳宝琛(1932年〈壬申〉11月) |
| ④袁金鎧(1929年〈己巳〉1月) | ⑤羅振玉 |
| ⑥王樹枬(1929年〈己巳〉8月) | ⑦吳廷燮(1929年〈己巳〉9月) |
| ⑧吳闓生 | ⑨吳郁生(1931年〈辛未〉6月) |
| ⑩王埜(1931年〈辛未〉夏) | ⑪鄭孝胥(1935年〈乙亥〉6月) |
| ⑫商衍瀛(1936年〈康德3年丙子〉春分) | ⑬陳曾寿(1936年〈丙子〉3月) |

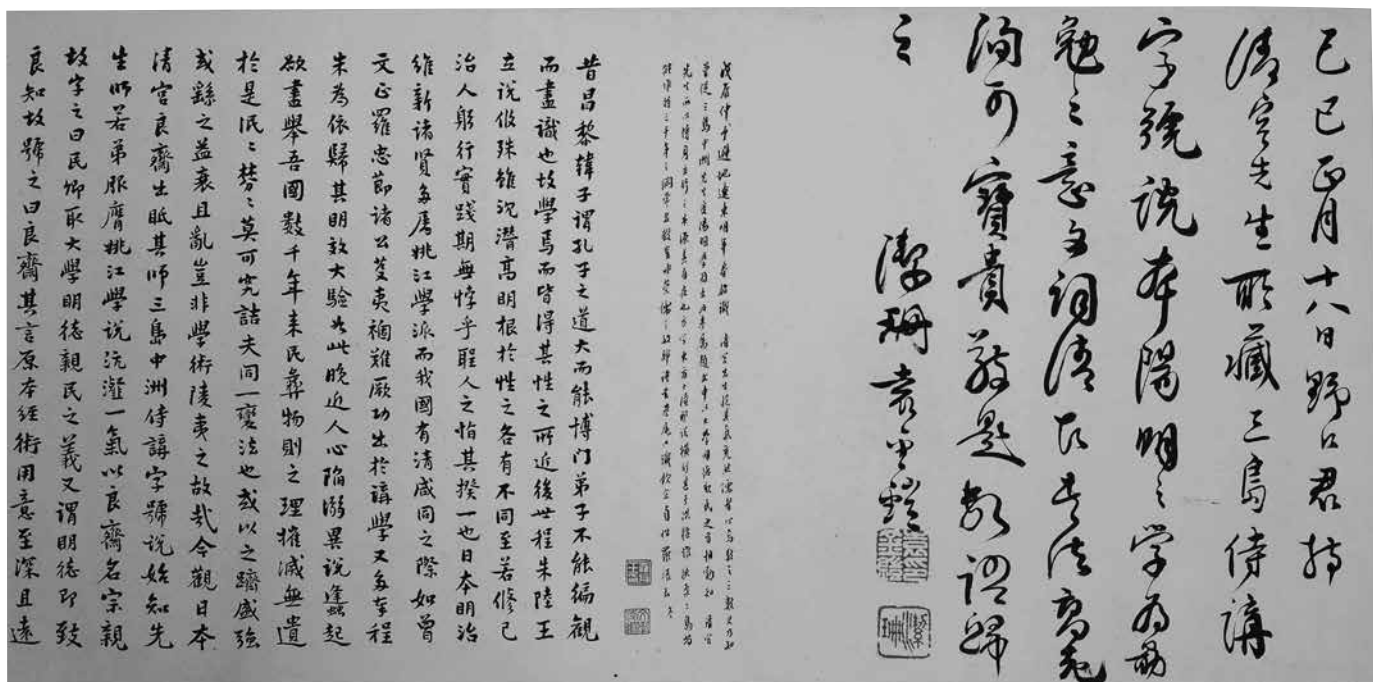


▲袁金鎧箱題
劉希淹題簽



▲陳宝琛跋

▲三島中洲



▲王樹枏

▲羅振玉

▲袁金鎧

我愛新覺羅之起於東北也
 性誠俗朴不務名不自矜醇如
 也入關後漸染侈靡之習致
 有水弱之患鄰邦日本國尊
 君家老尚武爰羣有足多者
 古人易言曰東方多君子之國其
 信然乎歐風在漸時異勢殊
 以中原五千年道德文化之鄉先
 倡吾父吾君之誠感也誣民難且
 未艾而于今日竟能遇此卷於金鈔
 上海濱嗚呼文成良知之學衰矣
 中洲先生不才得而見矣得讀其文
 而友其弟子亦幸矣 清宮宗親
 明師之訓充良知之心是亦中洲
 先生之福自幸天德王道仍存
 於東北之維辰閱既去為之懼
 然者久之

宣統庚午夏 恭親王題

▲恭親王

王文成公銅像記

明治戊申春門人清宮氏卿
 自清國貴州齋一銅像片示
 曰貴州有劉海帆者遠祖三
 王在王文成公門公亡後門
 人胥謀鑄公銅像若干相分
 以寓追慕之意三五亦藏其
 一子孫竊官貴州遂土著傳
 至海帆弟曾受王學於先生
 景慕文成久矣遂購求請先
 生記之余薰沐拜觀則高尺
 許左手持書卷右手垂至膝
 眼光注書威容儼然神采躍
 如不覺起敬者久之既數年
 民卿懇促不已乃謂之曰
 子亦託公語乎公嘗曰胸
 中有聖人蓋謂良知也良
 知無聖人在則聖亡則凡
 子苟存良知良知昭然萬理
 出天下何事不可處則子
 胸中常有聖人又有文成
 矣何必尊奉此銅像雖然
 學有內脩外脩心存養良
 知內脩也就經史模範聖

▲三島中洲

8-① | 三島中洲撰「王文成公銅像記」(1914年〈大正3〉11月、中洲85歳)

王文成公銅像(8-②)は清宮宗親が貴陽滞在中の1907年(明治40)7月に王陽明の門人劉三五の子孫である劉海帆から購入し、翌年3月の帰国時に持ち帰ったもの。像記を請われた中洲は、18年前の「良知」説を骨子とする「字号説」の内容を受けて、「良知」の実現には「心に良知を存養する内脩」と「経史に就いて聖賢の言行を模範として以て自ら省察する外脩」の内外兼脩が大切であると説く。清宮宗親はこの前年1913年(大正2)に関東庁都督府の通訳官となっており、その中国での活動の転機に当たる。中洲の二つの文は、王陽明「良知説」を主張する点で一貫し、かつ活動の場を広げていく門人に期待する点で前後照応する内容となっている。中洲85歳の書は、その最晩年の筆致の特徴を示しつつも老頹を感じさせず比較的整っている。

(箱の蓋に刻された文字)

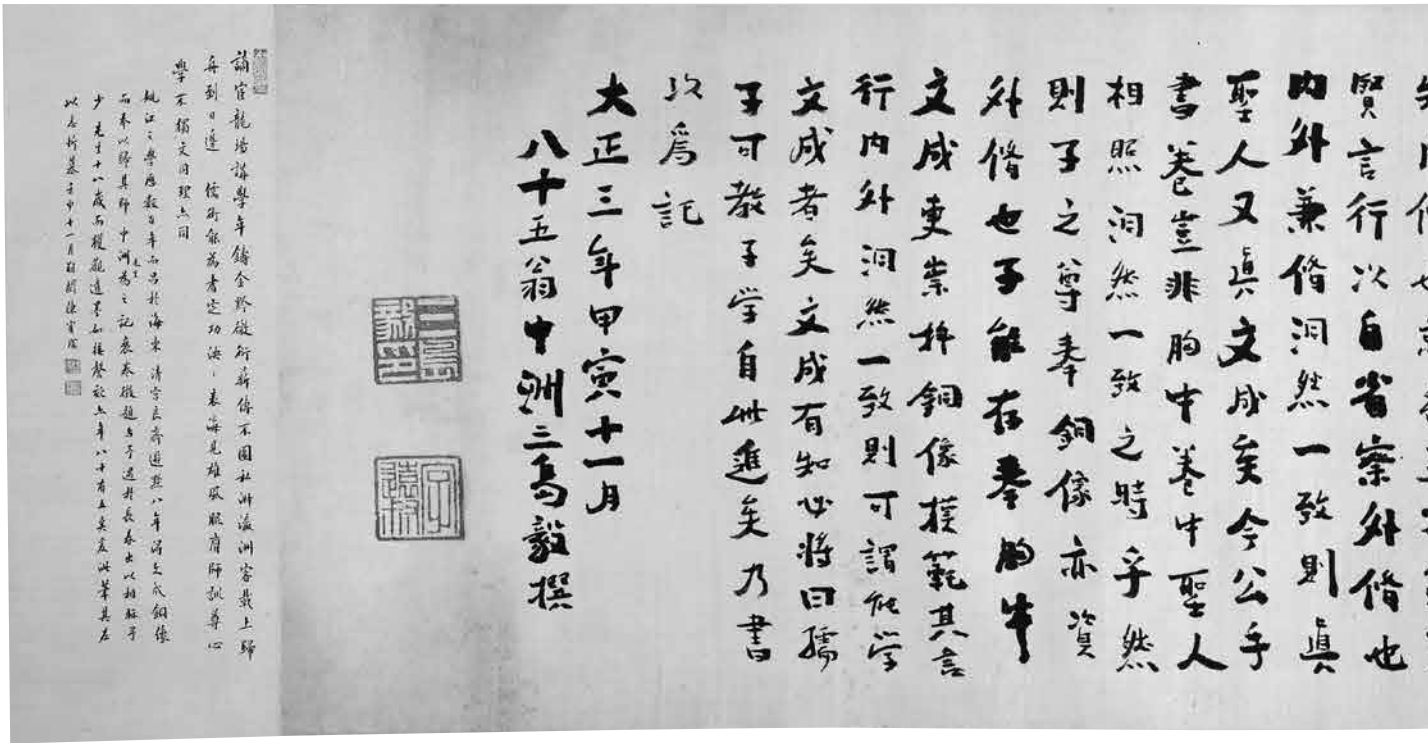
(右) 陽明先生像 清宮宗親

(左) 明治四十年七月 在大清国貴州購之

8-②

王文成公銅像 木箱入、
台座附属

(1907年〈明治40〉7月貴州にて清宮宗親
が購入)



諸家の題跋：三島中洲の「王文成公銅像記」(②)の前に恭親王の題記、以下、次の題跋が続く。

- ① 恭親王 (1930年〈宣統庚午〉夏)
- ② 陳宝琛 (七絶二首、1932年〈壬申〉11月)
- ③ 袁金鎧 (1929年〈己巳〉1月)
- ④ 羅振玉 (1929年〈己巳〉4月)
- ⑤ 王樹枏 (1929年〈己巳〉8月)
- ⑥ 吳廷燮 (己巳〈1929〉9月)
- ⑦ 吳闓生 (1929年〈己巳〉10月)
- ⑧ 吳郁生 (辛未〈1931〉6月)
- ⑨ 王埉 (1931年〈辛未〉夏)
- ⑩ 宝熙 (大同癸酉〈1933〉2月)

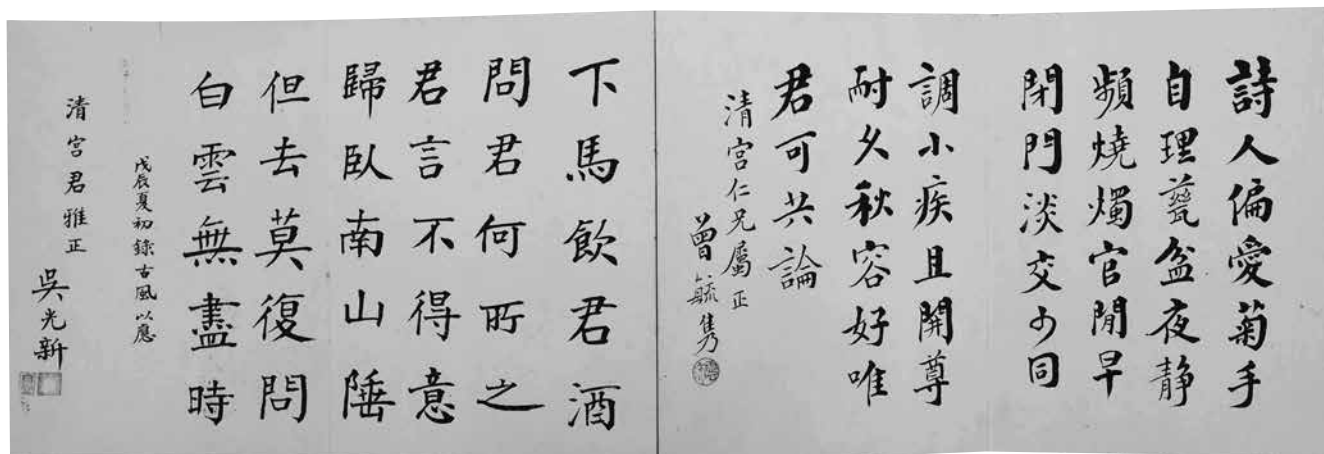
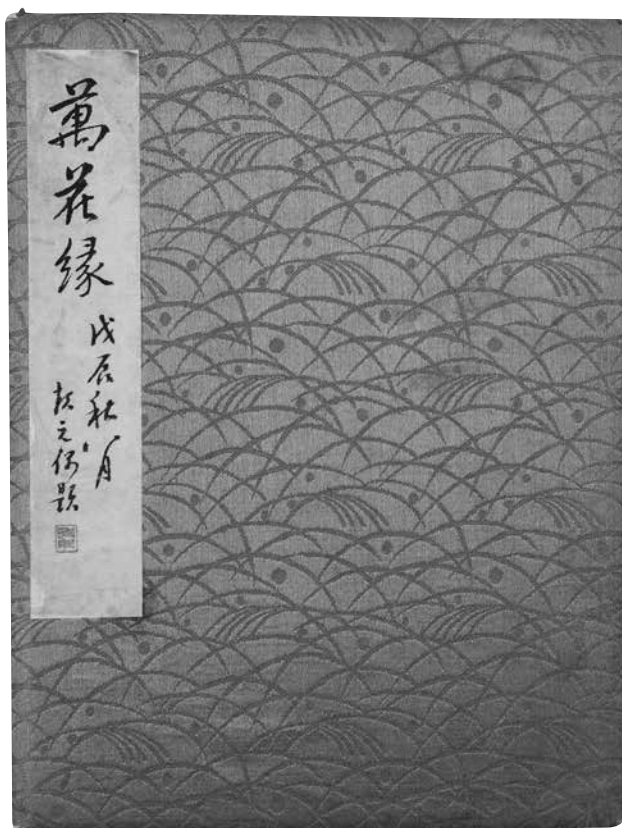
9 書画帖『萬花縁』(1928~1930年〈昭和3~5〉)

清宮宗親が諸家に揮毫依頼して作った書画帖。
起元の題簽。

〔主な揮毫者〕

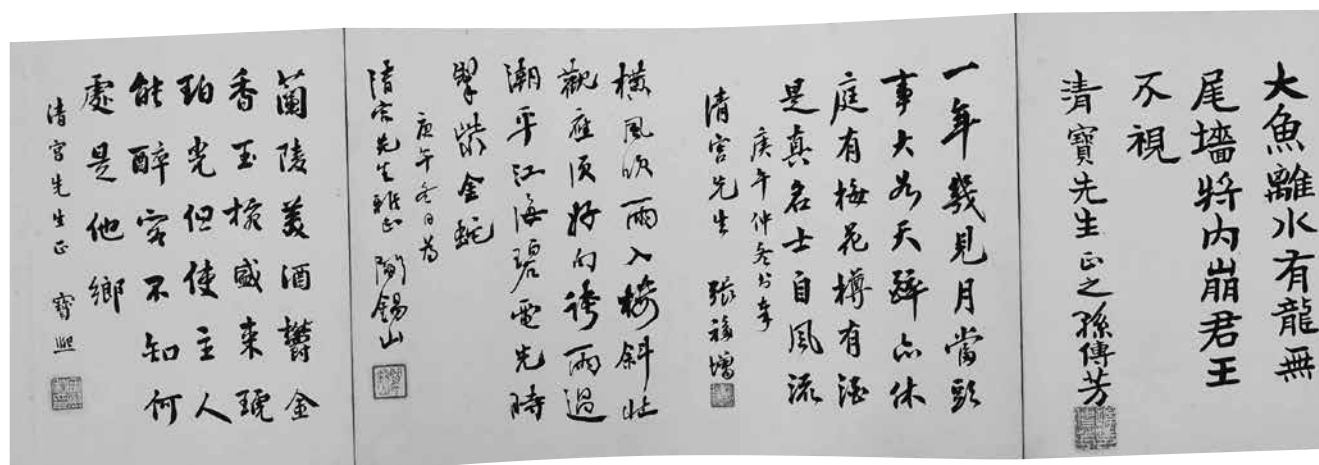
- 曾毓雋 (1875~1957) 1897年举人、安徽派政治家
- 吳光新 (1881~1939) 陸士卒、段祺瑞義弟
- 張弧 (1875~1939) 1904年举人
- 張国淦 (1871~1959) 1902年举人
- 孫伝芳 (1885~1935) 陸士卒、直隸派軍人
- 閻錫山 (1883~1960) 陸士卒、国民党政府内政部長
- 宝熙 (1871~1942) 滿州国執政政府中令
- 鄒魯 (1885~1954) 革命家、反蔣のち和解
- 謝介石 (1878~1954) 滿州国外交部総長

(題簽)「萬花縁 戊辰秋八月
起元偶題」



▲吳光新

▲曾毓雋



▲宝熙

▲閻錫山

▲張福増

▲孫伝芳

10 書画帖『翰墨因縁』(1931年〈昭和6〉)

清宮宗親が諸家に揮毫依頼して作った書画帖。
劉希淹の題簽。

〔主な揮毫者〕

恭親王（既出）

潘復（1883～1936）北京政府国務院総理

李経方（1855～1934）1882年挙人、李鴻章養子

国分三亥（1864～1962）検事、二松学舎理事長

山田準（1867～1952）二松学舎専門学校初代校長

奥忠彦（1869～？）

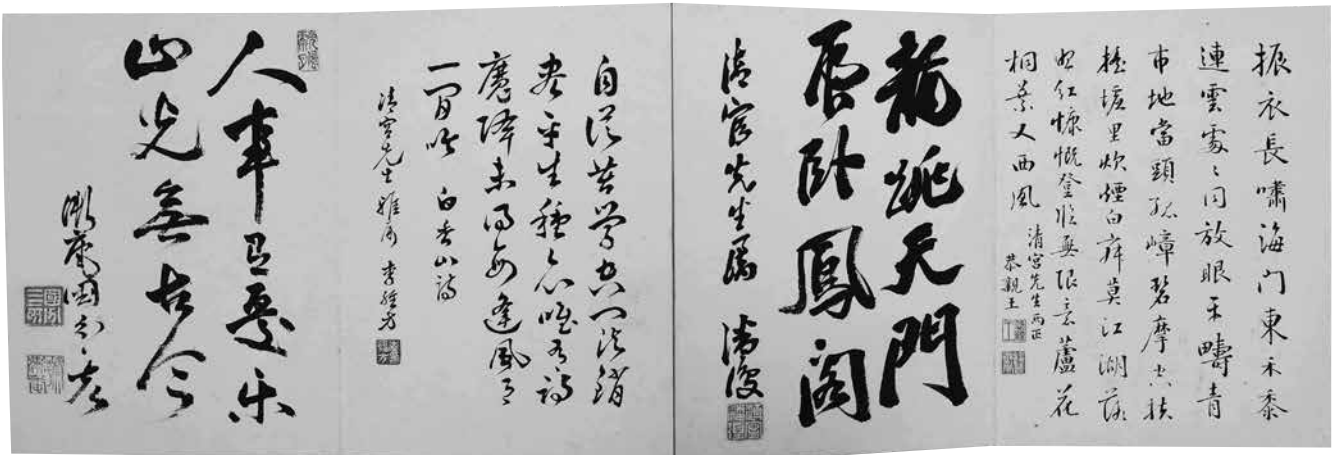
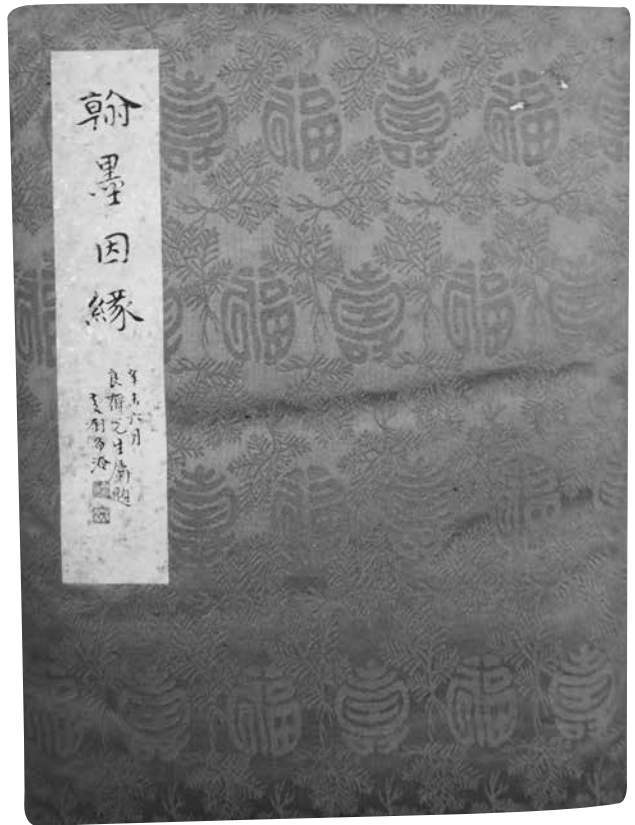
李思浩（1882～1968）1903年挙人、安徽派政治家

菱刈隆（1871～1952）陸軍大将、関東軍司令官

呉郁生（1854～1940）郵電部尚書、後年青島寓居

王埤（1857～1933）1889年進士、書家、青島寓居

（題簽）「翰墨因縁 辛未六月 良齋先生属題
叔文劉希淹」

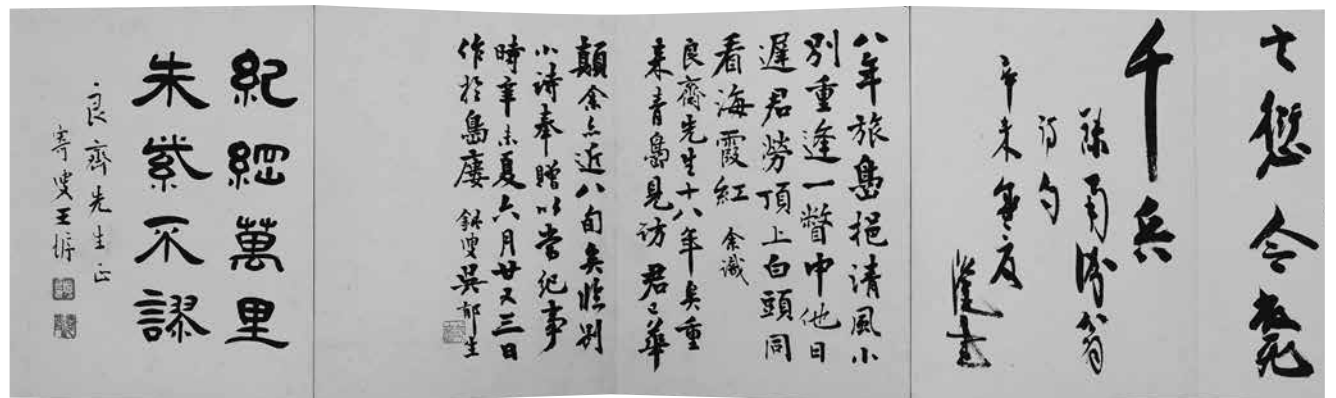


▲国分三亥

▲李経方

▲潘復

▲恭親王



▲王埤

▲呉郁生

▲菱刈隆



11 | 写真帖『満洲事變記念写真帖』
(1931年〈昭和6〉)

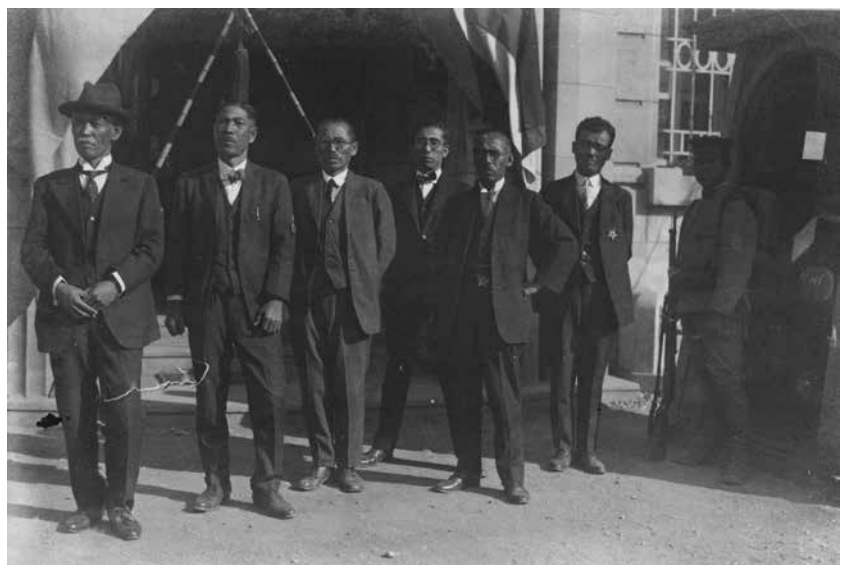
(上) 関東軍司令部 (駐奉天)



(下) 事變二日目に於ける奉天城内の状況

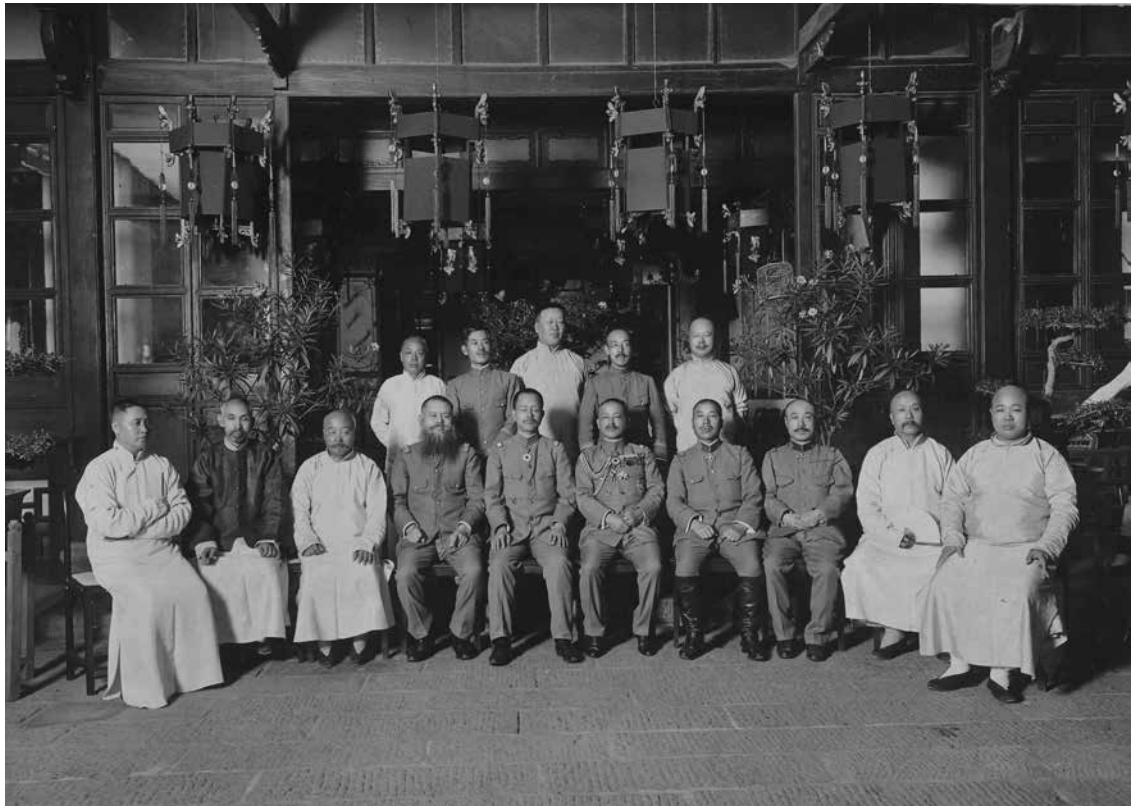
清宮は二松学舎在学中に二松学舎出身の陸軍軍人福島安正と面識を得ており、1912年（明治45）に福島が関東庁都督となるとその知遇により関東軍の通訳官となって、旅順、青島、北京、天津などで活動した。その後満州事變の結果、満洲国が建国されると、清宮は宮内府繙訳官、帝室大典委員会嘱託などの職についた。

展示品は満州事變の時期に満州各地の写真を収めた写真帖で、写真に添えられた説明は清宮宗親の筆跡にかかるものと思われる。



12 | 写真帖〔満州建国〕（1932～34年〈昭和7～9=大同元～康德元〉頃）

展示品は、満州国建国（1932年3月1日）から帝政樹立（1934年3月1日）にいたる時期の新京の様子を写したと思われる写真帖で、町の到るところに祝賀ムードが溢れている。スーツ姿の6人（左端が清宮）の写真は、清宮が就任した帝室大典委員会の関係者を写したものかもしれない。



* 13-① | 集合写真〔日本軍人と中国人たち〕

後列左から2人目が清宮宗親



* 13-② | 集合写真〔本庄繁関東軍司令官（前列中央）と満州国要人たち〕

後列左から2人目が清宮宗親



* 13-③ | 集合写真〔承光門前に並ぶ満州国の文武官たち〕1934年12月27日

前列中央愛新覺羅溥儀、左隣が鄭孝胥総理、右隣が南次郎大使。最後列右端が清宮宗親。
写真裏面に清宮宗親による「九年十二月廿七日南大使国書奉呈式紀念」の文字がある。



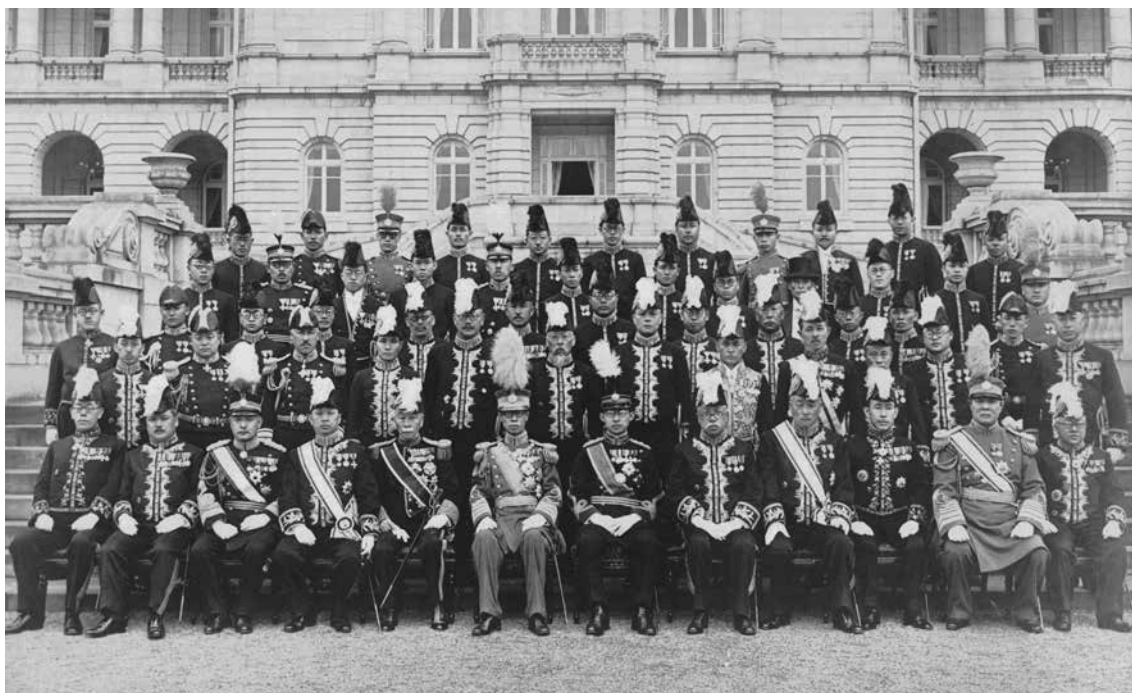
* 13-④ | 集合写真〔居並ぶ満州国の文武官たち〕

2列目左から4人目が清宮宗親。



▲
* 13-⑤ | 集合写真〔満州国の文武官たち〕

中央着座が愛新覚羅溥儀。その右3人目が鄭孝胥総理。左から5人目が清宮宗親。



▲
* 13-⑥ | 集合写真〔満州国建国記念式後の礼服姿の文武官たち〕 (1934年〈康德元〉3月1日)

満州建国2周年を記念して、大同3年3月1日を康德元年と改元し、執政愛新覚羅溥儀が帝位に昇った。1列目右から7人目が康德帝。右隣は秩父宮雍仁親王。3列目右から2人目が清宮宗親。



* 14-① | 満州国官吏時代の清宮宗親の写真

満州国建国記念式後の記念写真（1934年〈康徳元〉3月1日か、清宮宗親59歳）



* 14-② |



* 14-③ |



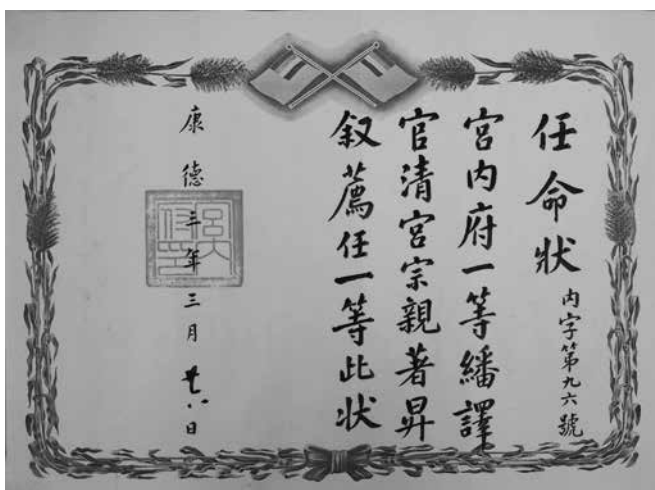
* 14-④ |



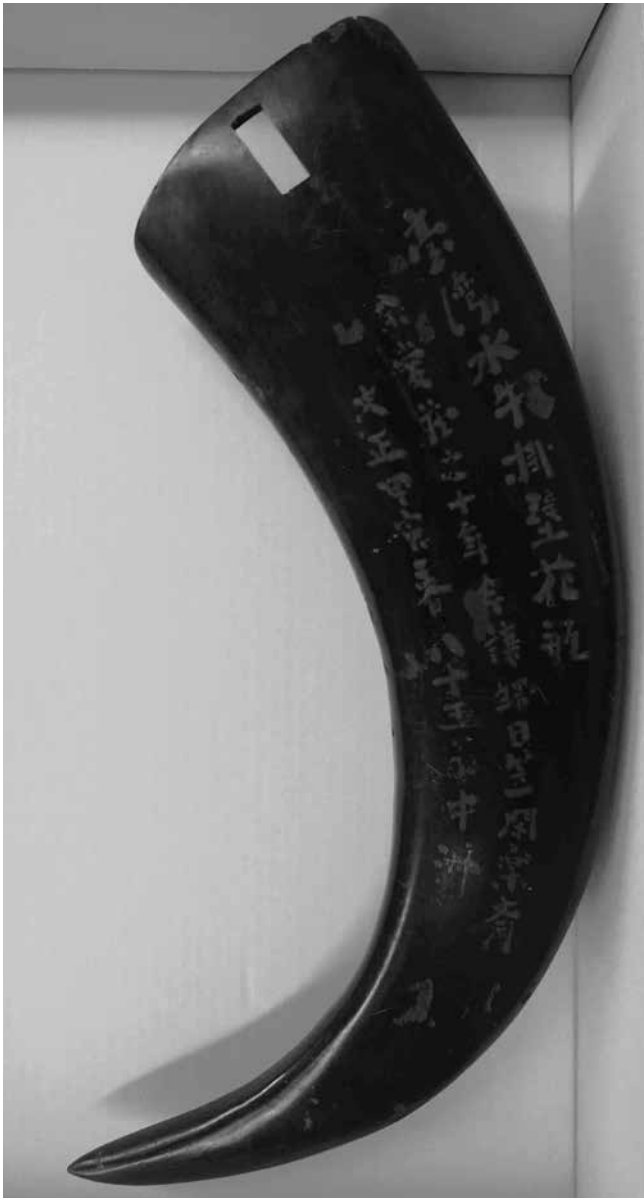
* 14-⑤ |



* 15 | 清宮宗親の葬儀の写真 (1936年〈康德3〉3月29日)



16 | (上段) 清宮宗親の中華民国からの叙勲、(下段) 満州国からの任命書



▲裏面



▲表面

17 | 三島中洲旧蔵の水牛角製の掛花入

三島中洲の愛蔵にかかる壁に掛けて用いる花入。三島中洲の入手経路は不明だが、二松学舎出身者で台湾で奉職した者は多く（武官に藤井幸槌・城井道太郎、文官に佐倉孫三・吹野信履・橋本武・伊能嘉矩・尾立維孝・莊田要次郎、実業家に山本悌二郎らがある）、こうした門人から贈られたものかもしれない。裏面の中洲による朱漆識語から、1915年（大正4）春、85歳の時に甥の日笠斐夫に贈られたことが分かる。日笠斐夫は中洲の妹増子が備中児島郡藤戸村の大庄屋日笠家（分家の日笠栄昌）に嫁し、この夫婦が三宅家から迎え養子で、開塾間もない二松学舎に学んだ。清宮宗親の所蔵に帰した経緯は未詳。

【翻刻】「台湾水牛掛壁花瓶
余愛蔵二十年、今譲甥日笠閑楽斎。
大正甲寅春八十五翁中洲」

18 | 三島中洲書幅 (七言絶句)
1896年(明治29)秋(三島中洲67歳)

清宮宗親は三島中洲からの信頼が厚く、この年(1896年)中洲が東宮侍講を拜命し、東宮(後の大正天皇)に随従して7~9月に日光と塩原温泉に約60日にわたって滞在した際、同行して老師を扶助して詩稿の整理などに当たった。展示品は、9月に入って帰京するに当たり中洲が清宮の功を「孔門の子夏」に比した詩を作って贈り、その労をねぎらったもの。

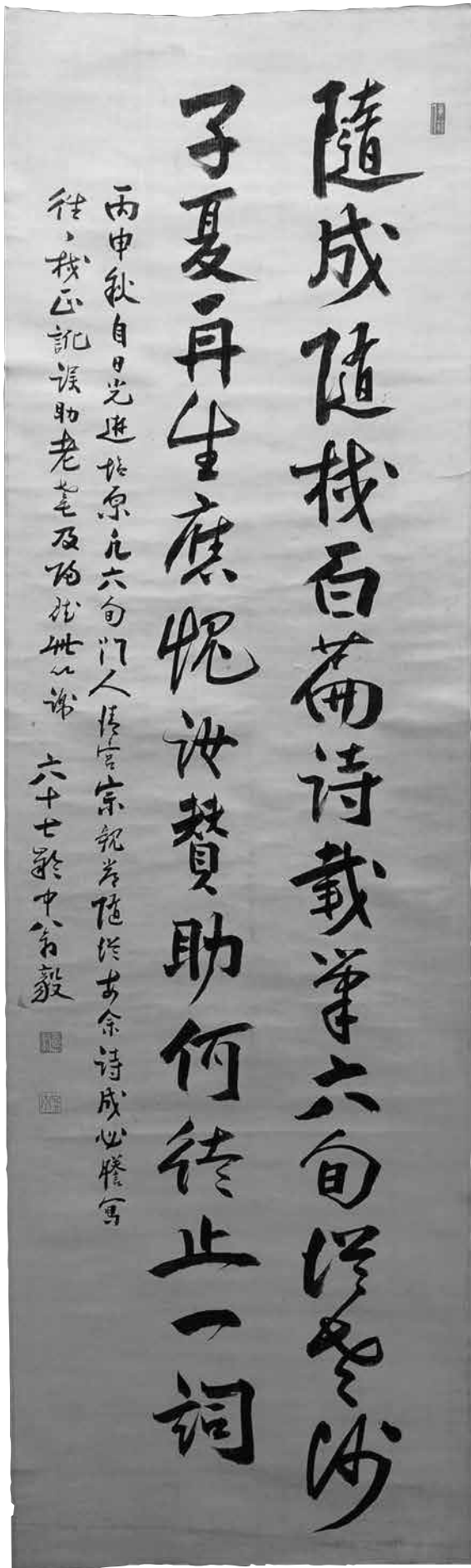
【翻刻】

[関防印] 「黄薇人」

随成随校百篇詩 載筆六句従老師
子夏再生応愧汝 賛助何徒止一詞
丙申秋自日光遊塩原凡六句、門人清宮宗親
常随従、每余詩成必贍写、往々校正訛誤助老
耄、及帰賦以謝 六十七齡中翁毅

[落款印] 「三島毅」「中洲」

(随成随校百篇の詩 載筆六句老師に従ふ
子夏再生するも応に汝に愧ずべし
賛助何ぞ徒だに一詞のみに止まらんや
丙申秋日光より塩原に遊ぶこと凡六句、門人
清宮宗親常に随従し、余が詩の成る毎に必ず
贍写し、往々にして訛誤を校正して老耄を
助く。帰るに及んで賦して以て謝す。)



隨成隨校百篇詩載筆六句
子夏再生應愧汝賛助何徒止一詞

丙申秋自日光遊塩原凡六句門人清宮宗親常随従每余詩成必贍写
往々校正訛誤助老耄及帰賦以謝

六十七齡中翁毅



19 三島中洲書幅
 (七言絶句) 明治壬寅春送清宮民卿遊清国
 1902年(明治35)春(三島中洲73歳)

1902年(明治35)春、27歳の清宮宗親は貴州省貴陽府から日本人教習として招聘されて赴任している。展示品は、清宮が渡清する際に三島中洲が贈った送別詩である。用箋の折皺はこれが長年折り畳まれていたことを示し、表装の仕様から渡清時にこれを携帯した清宮が清国で表装したものであることを示す。

中洲から贈られた送別詩の言葉を清宮は服膺し、貴州省滞在中は長期休暇ごとに貴州・雲南の各地を踏査して各地の要人と面会し見聞を広めた。見聞はそのつど東京の三島中洲に報告されたものと考えられる。

【翻刻】

[関防印]「寒流石上一株松舎」

蛩雪十年学艸廬 雄飛一旦夙望舒
 婦来待汝為吾語 未見江山未見書
 明治壬寅春送清宮民卿遊清国。

老師東宮侍講三島毅

[落款印]「三島毅印」「字遠叔」

(蛩雪十年艸廬に学び

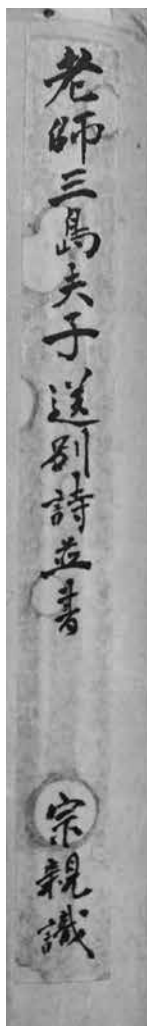
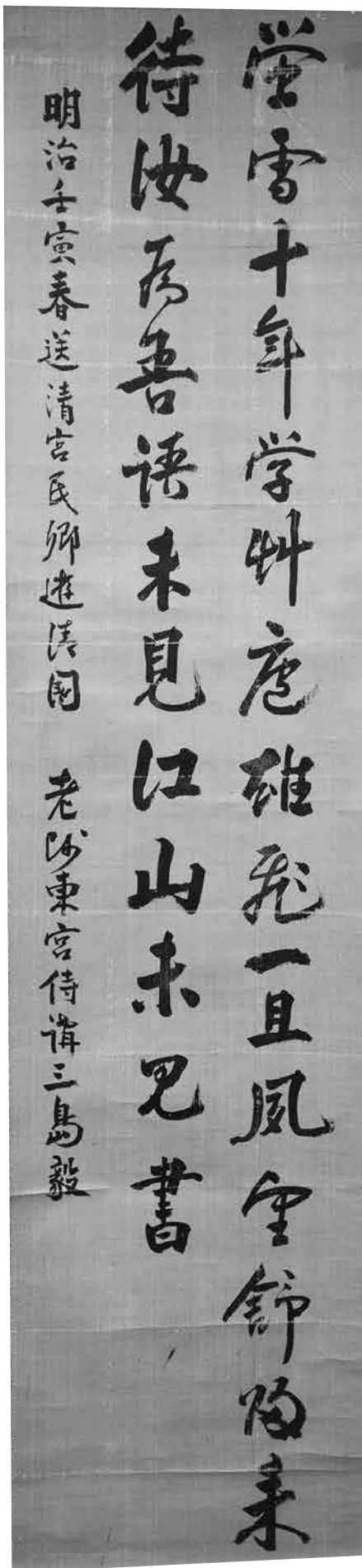
雄飛一旦夙望舒ぶ

帰り来って汝吾が為に語るを待つ

いまだ見ざる江山いまだ見ざる書

明治壬寅春、清宮民卿の清国に遊ぶを送る。

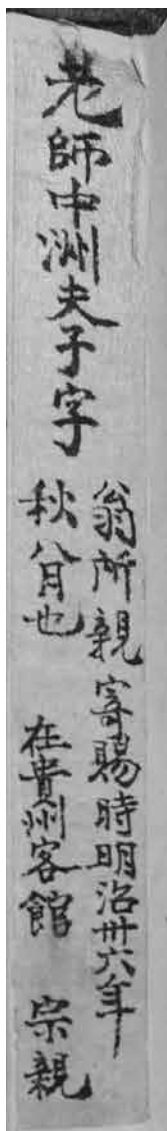
老師東宮侍講三島毅)



20 | 三島中洲書幅「(七言絶句)」
1903年(明治36)8月(三島中洲74歳)

款記に言う「陽明四句訣」とは、王陽明『伝習録』にある「無善無恶心之体、有善有恶意之動、知善知惡是良知、為善去惡是格物（善なく悪なきは心の体、善あり悪あるは意の動、善を知り悪を知るはこれ良知、善を為し悪を去るはこれ格物）」のこと。三島中洲は漢学だけ修めているわけにはいかない明治新世代の学生に向けて、道徳を修める捷径として「陽明四句訣」を推奨した（『中洲講話』）。

展示品は、座右銘にするために皇太子嘉仁親王が「陽明四句訣」の揮毫を三島中洲に命じ、これに感激した中洲が陽明学について詠じた七言絶句を揮毫した書幅。1903年(明治36)8月に中洲が貴陽の清宮宗親のもとにわざわざ送寄したものであり、濃やかな師弟関係を物語る。



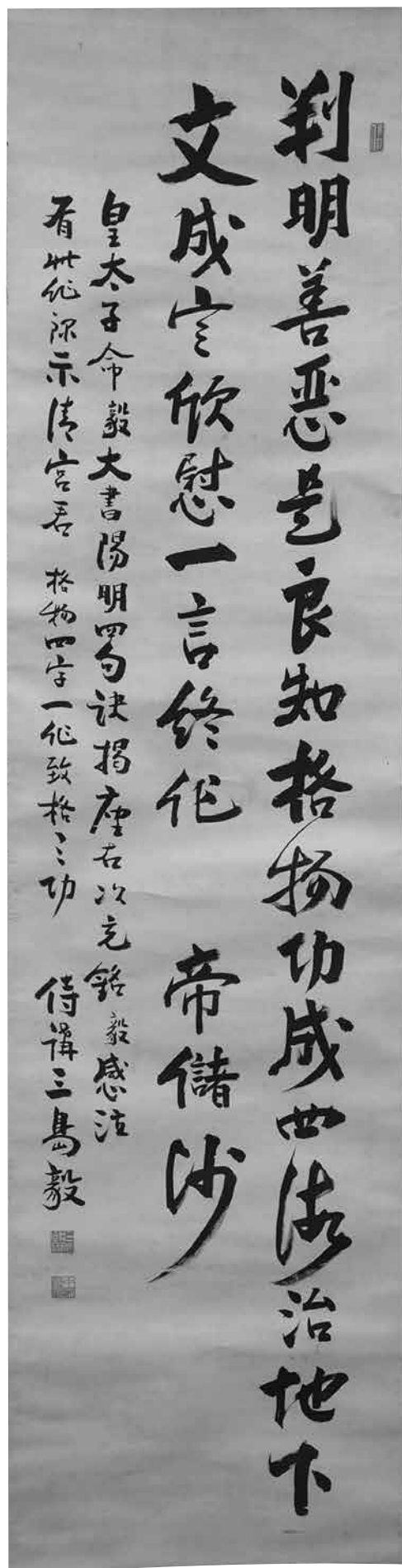
【翻刻】

[関防印] 「黄薇人」

判明善惡是良知 格物功成四海治
地下文成定欣慰 一言終作帝儲師
皇太子命毅大書陽明四句訣揭座右以充銘、
毅感泣有此作、録示清宮君。

[落款印] 「三島毅字遠叔」「中洲漁韻」

(善惡を判明するは是れ良知、
格物功成って四海治まる。
地下の文成定めて欣慰するならん、
一言終に帝儲の師と作る。
皇太子、毅に命じて陽明四句訣を大書せしめ、座右に掲げて以て銘に充つ。毅感泣して此の作有り、録して清宮君に示す。)



三島中洲書幅

21 「(七言絶句) 寿宴席上作」

1917年(大正6、三島中洲88歳)

展示品は門人たちが企画した中洲米寿の宴に出席した際に中洲が揮毫した七言絶句の書幅。三島中洲最晩年の虚飾を排した素朴な筆致を示しつつ、この時期の筆跡としては比較的整っている。裏書から、清宮が本書幅を「七生堂」「左狂耄人」と号した二松学舎同門の人物(或は「左伝」学者として知られる那智佐典のことか)から1936年(昭和11)2月に贈られたことが分かる。

清宮宗親は1935年に胃癌を患い療養のために帰国し、翌年2月24日に満州に戻ったのち3月25日に病没しているので、恐らくは清宮の病氣見舞い、或は渡満の際の贖として贈られたものである。

【翻刻】

[関防印] 「黄薇人」

何幸菲才浅学身 来慶三百許名賓

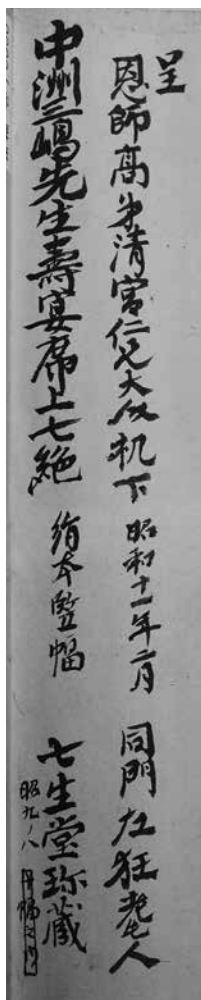
後生漫擬地僊老 大正春如延喜春

寿宴席上作 八十八叟中洲毅

(何の幸ひぞ菲才浅学の身、来り慶す三百許名の賓。

後生漫に擬す地僊老、大正の春は延喜の春の如し。)

[落款印] 「三島毅字遠叔」「中洲漁顔」



22 | 福島安正書幅「(七言二句)波斯行」

福島安正（1852～1919、信州松本藩士出身）は陸軍軍人で、多言語に通じ、いわゆる情報将校として知られた。はじめ開成学校に学び、司法省出仕後、陸軍省に移籍し、陸軍任官後に二松学舎に学び漢学にも通じた。

1892～93年（明治25～26）のシベリア単騎横断で知られるが、その他にもインド（1886年）、バルカン半島（1889年）、ヨーロッパ・アジア（1895～97年）などの踏査を行っている。

「波斯行」は白楽天「琵琶行」の如く「樂府体」と呼ばれる古体詩に用いられる詩題である。福島安正の詩集（『大陸征旅詩集』）によれば、1896年（明治29）夏に中央アジアを100日餘りかけて踏査した時の作で、「波斯歌」とも称する七言36句からなる長編である。二句目には異同がある。

なお、清宮宗親が最初に福島安正と面識を得たのは、福島がヨーロッパ・アジア踏査から帰国した1897年、6月6日に二松学舎で開かれた遠征帰朝歓迎会の折のことと推定され、清宮の中国大陸における活動は福島安正の人脈によるところが大きい。

【翻刻】

〔関防印〕 「長風万里」

食瓜臥地飲雨水

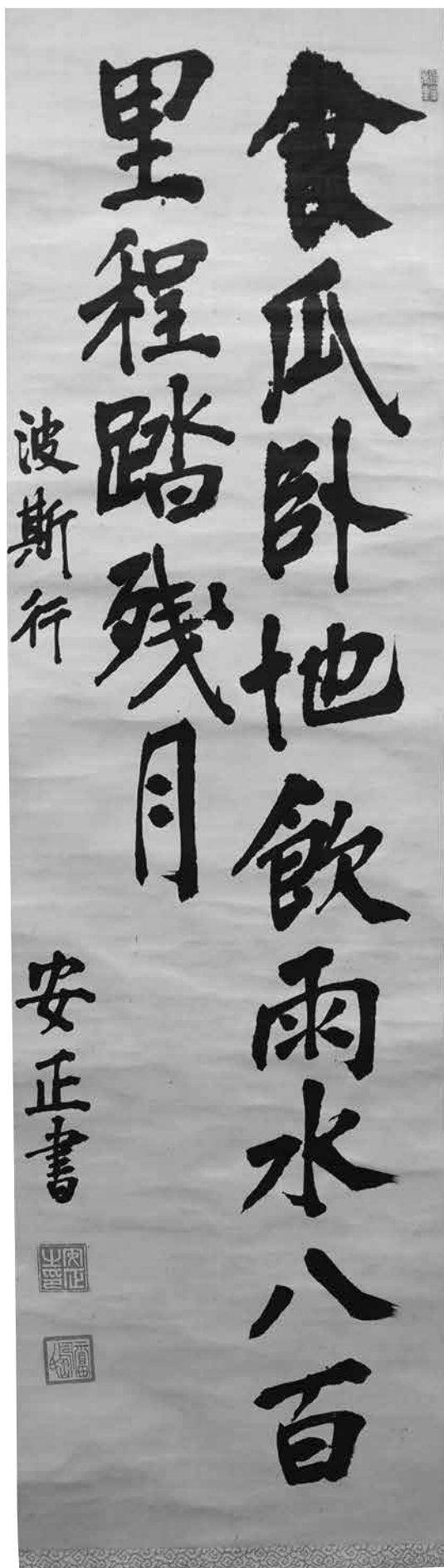
八百里程踏残月

波斯行 安正書

〔落款印〕 「安正之印」「福島」

（瓜を食み地に臥し雨水を飲む。

八百里程 残月を踏む。）



23 | 李翰芬書幅「(七律四首)」
(1908年(明治41)3月)

清宮宗親は6年間(足掛け8年)の貴陽滞在を終えて1908年(明治41)3月に同僚岩原大三郎と共に帰国した。着任時の同僚木藤武彦は翌年離任し、後任の岡山源六(西村天四門人)は生徒殴打事件を起こして免職となり、替って着任したのが岩原である。長く滞在した清宮の人脈は後年の中国大陸での活動に生かされた。

1908年に貴陽から離任帰国する際に、清宮は桂林に立ち寄り、福州を経て帰国したようで、次のような人物から留別の詩文を贈られている。

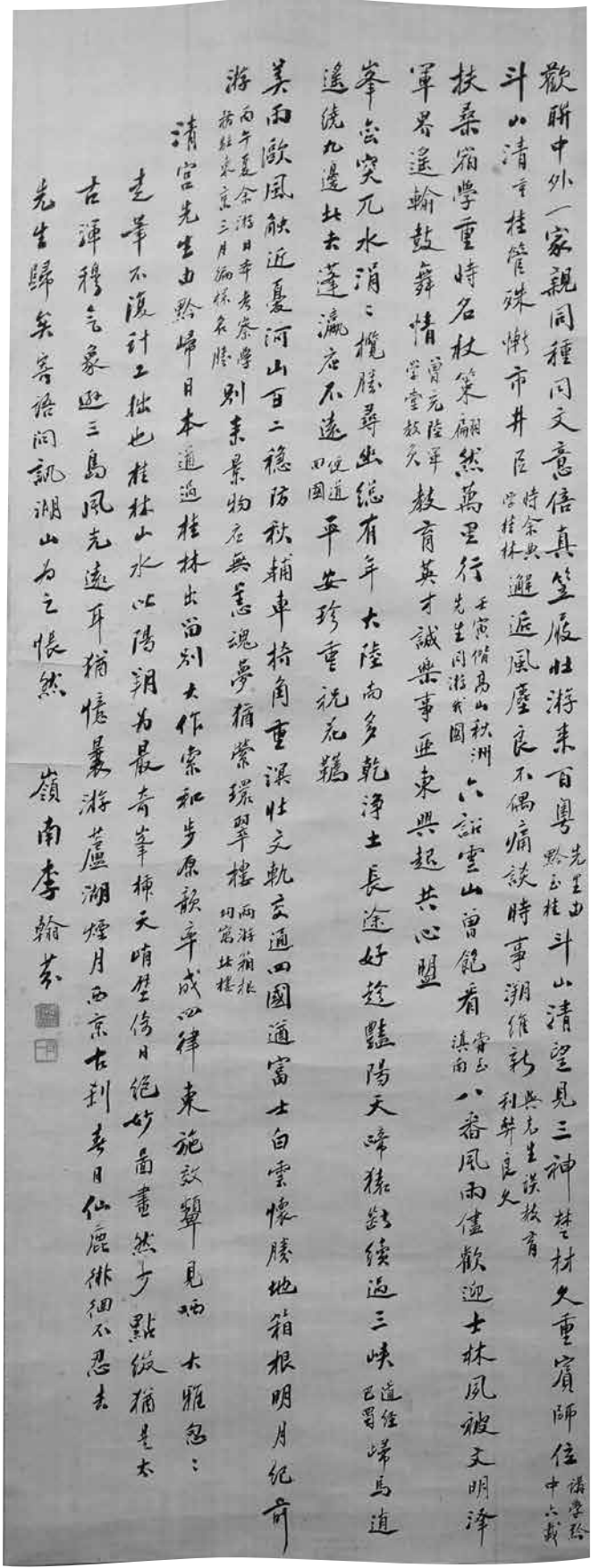
- 柯邵恣(1850~1933) 1886年進士
- 余誠格(1856~1926) 1889年進士、広西布政使
- 李翰芬(?~?) 1895年進士、広西提学使
- 于德楷(?~?) 貴陽師範学堂総理
- 嚴雋熙(?~?) 貴州按查使
- 劉郁貢(?~?) 福州侯官

展示品は、帰国途中に立ち寄った桂林で、李翰芬から贈られた七律四首。訪日経験のある李翰芬の送別詩は清宮の貴陽での閩歴、桂林の風光、日本の記憶を織り込んだ内容になっている。

【翻刻】

「飲聯中外一家親 同種同文意倍真 笠屐壯游來百粵 斗山清望見三神 楚材久重賓師位 斗山清 桂管殊漸市井臣 邂逅風塵良不偶 痛談時事溯維新 / 扶桑宿學重時名 杖策翩然万里行 下詔雲山曾飽看 八番風雨儘歡迎 士林夙被文明沢 軍界遥輸鼓舞情 教育英才誠樂事 亞東興起共心盟 / 峯巒突兀水涓々 攬勝尋出綫有年 大陸尚多乾淨土 長途好趁豔陽天 啼猿斷繞過三峽 歸馬逍遙繞九辺 此去蓬瀛應不遠 平安珍重祝花韉 / 吳雨歐風触近憂 河山百二穩防秋 輔車椅角重溟壯 文軌交通四國適 富士白雲懷勝地 箱根名月紀前游 則來景物應無恙 魂夢猶縈環翠樓

清宮先生由黔歸日本、道過桂林、出留別大作索和步原韻。率成四律、東施效顰見晒、大雅忽々走筆不復計工拙也。桂林山水以陽朔為最。奇峯挿天、峭壁倚日、絶妙凶画。然少点綴、猶是太古渾穆氣象、遊三島風光遠耳。猶憶曩游蘆湖煙月、西京古刹、春日仙鹿、徘徊不忍去。先生歸矣、寄語問訊湖山、為之悵然。嶺南李翰芬 (落款印)「李翰芬印」「守一」



飲聯中外一家親 同種同文意倍真 笠屐壯游來百粵 斗山清望見三神 楚材久重賓師位 斗山清 桂管殊漸市井臣 邂逅風塵良不偶 痛談時事溯維新 / 扶桑宿學重時名 杖策翩然万里行 下詔雲山曾飽看 八番風雨儘歡迎 士林夙被文明沢 軍界遥輸鼓舞情 教育英才誠樂事 亞東興起共心盟 / 峯巒突兀水涓々 攬勝尋出綫有年 大陸尚多乾淨土 長途好趁豔陽天 啼猿斷繞過三峽 歸馬逍遙繞九辺 此去蓬瀛應不遠 平安珍重祝花韉 / 吳雨歐風触近憂 河山百二穩防秋 輔車椅角重溟壯 文軌交通四國適 富士白雲懷勝地 箱根名月紀前游 則來景物應無恙 魂夢猶縈環翠樓

清宮先生由黔歸日本、道過桂林、出留別大作索和步原韻。率成四律、東施效顰見晒、大雅忽々走筆不復計工拙也。桂林山水以陽朔為最。奇峯挿天、峭壁倚日、絶妙凶画。然少点綴、猶是太古渾穆氣象、遊三島風光遠耳。猶憶曩游蘆湖煙月、西京古刹、春日仙鹿、徘徊不忍去。先生歸矣、寄語問訊湖山、為之悵然。嶺南李翰芬

24 | 「〔諸家寄合書〕」

清宮宗親が交流した中国人は、最初に赴任した貴州省、および雲南省の学者・教育者・政治家の人々と、満州国官吏時代の前後に接点のあった復辟派や軍閥の人々が多いが、孫文周辺の革命に身を投じた人々とも多少の交流があったようで、揮毫された年次や場所は未詳ながら、展示品のような寄せ書きも残っている。

〔主な揮毫者〕

朱大符（1885～1920、朱執信）1904年日本留学

戴季陶（1891～1949、号天仇）

彭程萬（1880～1978）1900年秀才

張群（1889～1990）1908年日本留学

余維謙（1882～？）軍人、日本留学

宮崎滔天（1871～1922）

【翻刻】

「清宮先生属

誠 松井

書同文 智 朱大符

日月光華旦復旦兮 天仇

至誠 善明

車同軌 張羣

回春 子純

惠風和暢 余維謙

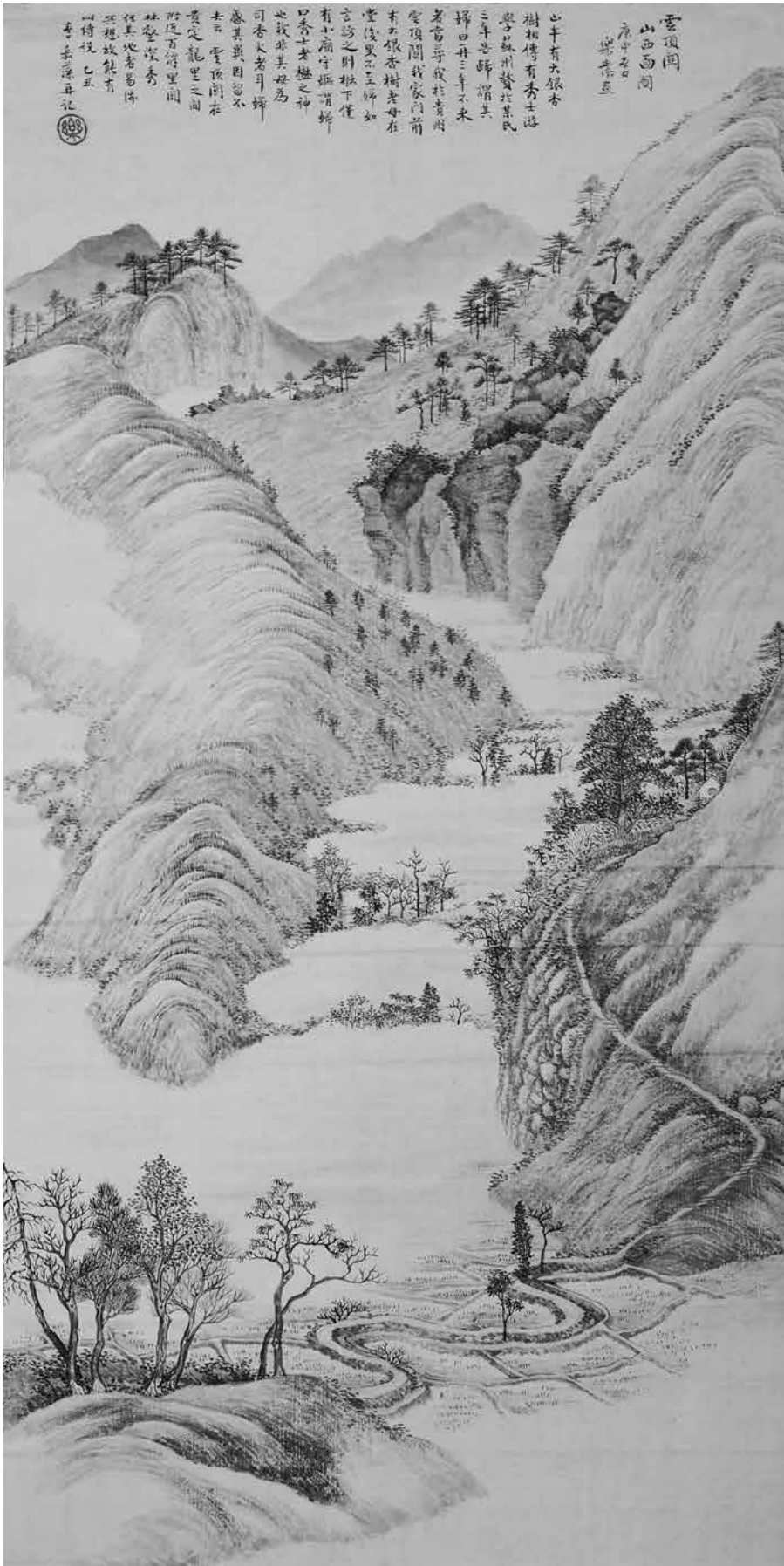
枕戈 彭程萬

吾党之士相会 滔天

誠 新田不孤」



25 | 楽嘉藻画「雲頂関山西面図」(1920年〈庚申春〉画、1925年〈乙丑春〉題)



楽嘉藻(1867～1944)は貴州出身で、1893年挙人、教育視察のために日本に渡り、帰国後、貴陽で于徳楷・李端棻・李裕増らと師範学堂を設立した。学堂運営費は主に楽嘉藻が負担したと言われる。のち武昌蜂起にも参加している。名著『中国建築史』の著者としても知られる。

清宮は1923年(大正12)に関東軍参謀部附となって北京に転任したらしく、ここで貴州時代の旧知の周恭寿や楽嘉藻と約20年ぶりに再会した。

【翻刻】「雲頂関山西面図」

庚申春日、楽嘉藻画。

山半有大銀杏樹相伝、有秀士游学蘇州、贅於某氏三年告帰、謂其婦曰、再三年不来者、当尋我於貴州雲頂関、我家門前有大銀杏樹、老母在堂後。果不至。婦如言訪之、則樹下僅有小廟、守嫗謂婦曰、秀士者樹之神也。我非其母、為司香火者耳。婦感其異、因留不去云。雲頂関在貴定龍里之間、附近百餘里間、林壑深秀、經其地者易涉冥想。故能有此伝説。乙丑春日 嘉藻再記。」

26 | 羅振玉書幅「(七言律詩)」

羅振玉(1866～1940)は辛亥革命後、日本に亡命し京都支那学の諸家と親交があったことで知られる学者。1919年に帰国し、1924年から愛新覚羅溥儀に召されてその教育係となり、翌年に溥儀に従って天津に移ったが、1928年に天津を離れて旅順に移り住んだ。

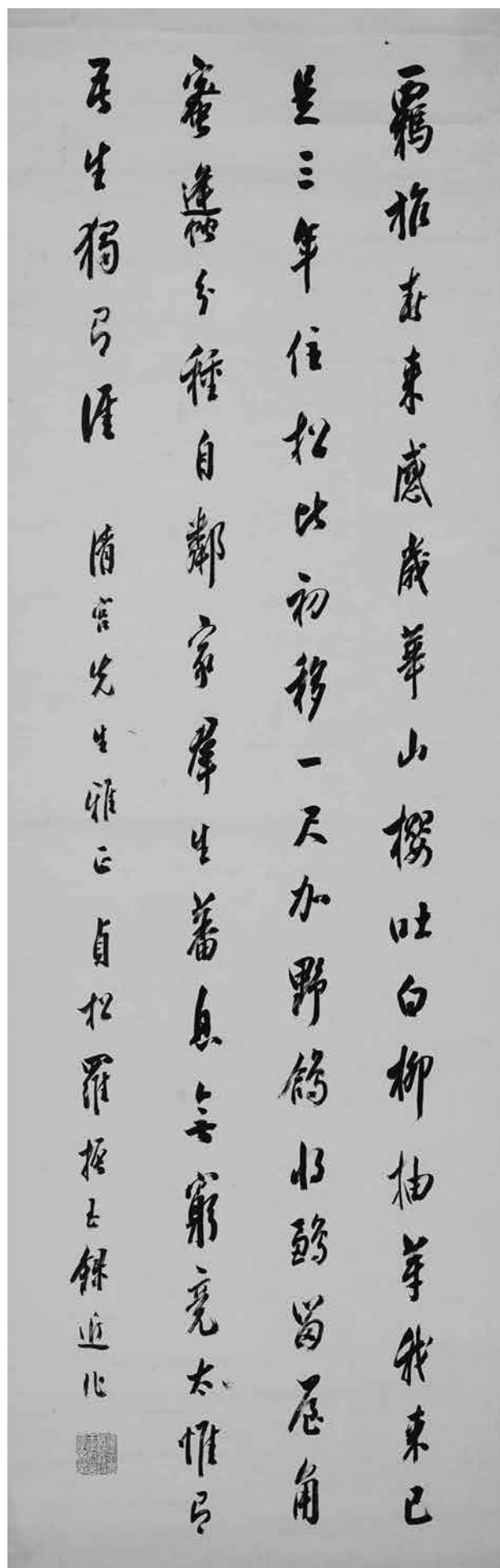
清宮宗親との交流は、羅振玉が1928年11月に旅順に移った翌1929年の春に始まり、満州国時代まで続く。清宮の家伝資料には、「字号説」「王文成公銅像記」の跋の外に、本書を含む4枚の書が伝わっている。

【翻刻】

羈旅春来感歲華 山桜吐白柳抽芽
 我来已是三年住 松比初移一尺加
 野鴿將雛留屋角 蜜蠶分種自隣家
 群生蕃息無窮竟 太惟有吾生独有涯
 清宮先生雅正 貞松羅振玉録近作

[落款印] 「上虞永豊郷人羅振玉
 字叔言亦字商遺」

(羈旅春来歳華に感じ、
 山桜は白を吐き柳は芽を抽く。
 我来りて已に是れ三年の住、
 松は初め移るころに比して一尺加はる。
 野鴿は雛を将りて屋角に留まり、
 蜜蠶は種を分ちて隣家自りす。
 群生蕃息して窮竟すること無く、
 惟だ吾生のみ独り涯有る有り。)



27 陳宝琛書幅（春秋繁露一則）
（壬申（1932年）10月）

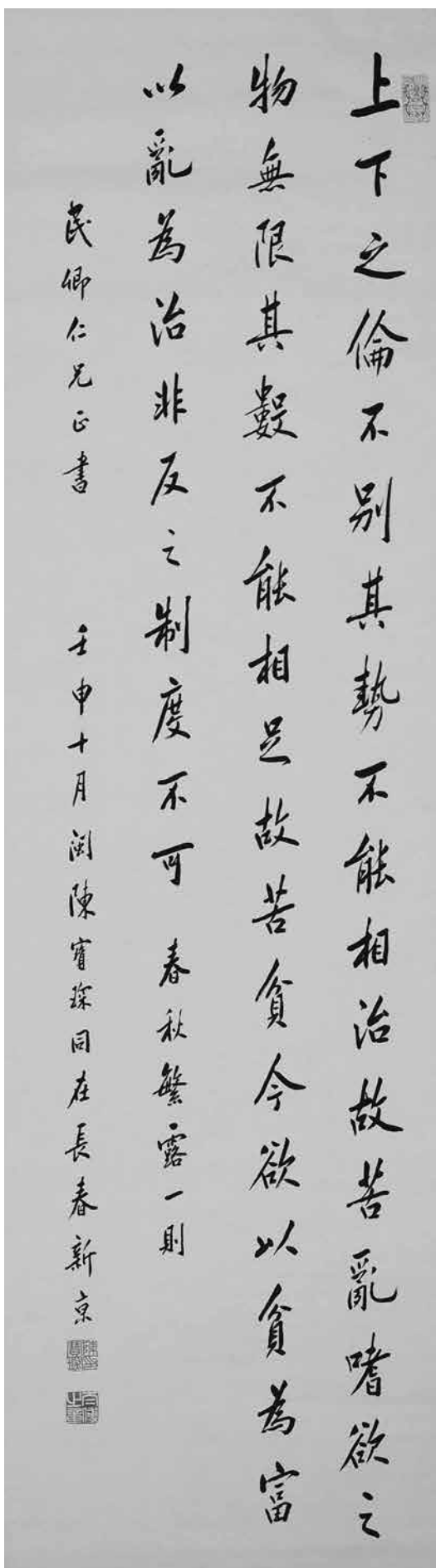
陳宝琛（1848～1935）は福建省閩県螺州の出身で、1868年に張之洞とともに進士。郷里に戻って教育事業に携わり、1908年に愛新覺羅溥儀が即位して宣統帝となると、翌1909年に召出されて北京に来たってその師傅となり、行動を共にした。宣統帝が廃位されてもなお紫禁城にとどまり、1925年に溥儀が天津に移った時もこれに従った。しかし満州国ができた時には、これに同行するよう言われたが固辞し、1935年に天津に87歳で歿した。

陳宝琛と清宮宗親との交流関係は、清宮の家伝資料に徴する限り1932年10～11月に限られる。これは、満州国が建国され溥儀がその執政に就任した際に、一時的に陳宝琛が首都新京（長春から改称）を訪れたものと考えられ、その際に清宮が陳宝琛に交わりを求めたものと推定される。

【翻刻】

「[関防印] 「御賜瓊梵瑞」

上下之倫不別、其勢不能相治。故苦亂嗜欲之物無限、其数不能相足、故苦貧。今欲以貧為富、以亂為治、非反之制度不可。春秋繁露一則。 民卿仁兄正書。壬申十月閩陳宝琛同在長春新京。[落款印]「陳宝琛印」「太傅之章」



III 資料編

三島中洲撰「王文成公銅像記」一卷（展示品8、H四六・五糎×W九七〇糎）

外題「三島博士王文成公銅象記 良齋先生囑題／叔文劉希淹辛未六月也 圈

圖」(H三三・〇糎×W一一・九糎)

① 恭親王の題記（用箋 紙本 H三九・八糎×W八四・八）

（印記）「御賜忠貞堅卓」

我愛新覺羅之起於東北也、性誠俗朴、不務名、不自矜、醇如也。入關後、漸染侈靡之習致、有水弱之懼。鄰邦日本國、尊君敬老、尚武愛群、有足多者。古人有言曰、東方多君子之國、其信然乎。歐風東漸、時異勢殊、以中原五千年道德文化之鄉、竟倡無父無君之說、惑世誣民亂且未艾。而予今日竟能遇此卷於金州之海濱。嗚呼文成良知之學衰矣。中洲先生不可得而見矣、得讀其文而友其弟子亦幸矣。清宮君守明師之訓、充良知之心、是亦中洲先生矣猶自幸。天德王道、仍厚育於東北之維、展閱既竟爲之惘然者久之。

宣統庚午夏（昭和五年〓一九三〇）、恭親王題。（印記）「和碩恭親王寶」錫晉齋印」

② 三島中洲の像記（用箋 絹本 H三九・八糎×W一四一・一糎）

王文成公銅像記（印記）「中洲」

明治戊申（四一年〓一九〇八年）春、門人清宮民卿、自清國貴州齋一銅像歸、示曰、貴州有劉海帆者、遠祖三五在王文成公門。公亡後、門人胥謀鑄公銅像若干、相分以寓追慕之意。三五亦藏其一。子孫霸官貴州、遂土着、傳至海帆。弟曾受王學於先生、景慕文成久矣、遂購求。請先生記之。余薰沐拜觀、則高尺許、左手捧書卷、右手垂至膝。眼光注書、威容儼然、神采躍如、不覺起敬

者久之。既數年、民卿懇促不已、乃謂之曰、子亦記公語乎。公會曰、胸中有聖人、蓋謂良知也。良知無聖凡、存則聖、亡則凡。子苟存良知、良知昭然、萬理出、天下何事不可處。則子胸中常有聖人、又有文成矣、何必尊奉此銅像。雖然、學有內修外修。心存養良知、內修也。就經史模範聖賢言行以自省察、外修也。內外兼修、洞然一致、則真聖人、又真文成矣。今公手書卷、豈非胸中聖人相照洞然一致之時乎。然則子之尊奉銅像、亦資外修也。子能存奉胸中文成、更崇拜銅像模範其言行、內外洞然一致、則可謂能學文成者矣。文成有知必將曰、孺子可教。子學自此進矣。乃書以爲記。

大正三年（一九一四）甲寅十一月、八十五翁中洲三島毅撰。（印記）「三島毅印」「字遠叔」

③ 陳寶琛の題詩（用箋 絹本 H四六・〇糎×W一三三・八糎）

謫官龍場講學年 鑄金黔徼衍薪傳 不圖私淑瀛洲客 載上歸舟至日邊
儒術能爲著定功 泱泱表海見雄風 服膺師訓尊心學 不獨文同理亦同
姚江之學、歷數百年而昌於海東。清宮良齋遊黔八年、得文成銅像而奉以歸。其師中洲先生爲之記、裝卷徵題。與予遇於長春、出以相眄。予少先生十八歲、而獲觀遺墨、如接警歎、亦年八十有五矣。爰泚筆其左以志忻慕。
壬申（昭和七年〓一九三二）十一月朔、閩陳寶琛。（印記）「陳寶琛印」「跋庵八十後作」

④ 袁金鎧の題記（用箋 紙本 ④⑤⑥⑦⑧一紙、H四三・〇糎×W一三三・〇糎）

三島先生篤好陽明之學、觀所題銅像記、推闡盡致、表裏洞然、有觸處豁朗境界、書法尤高古、無些子塵障繞其筆端、尤可寶也。

己巳（昭和四年〓一九二九）孟春元宵後三日、潔珊袁金鎧識。（印記）「袁金鎧印」「潔珊」

⑤ 羅振玉の題記

光緒丁酉（二三年）明治三〇年（一八九七年）、予寓居滬江、始與東邦學者締交、知吾鄉陽明先生之學盛行于海東。每覽明治中興史、知當日所以致隆盛者、固師武臣力所致、實以幕府崇尚儒術爲之基、德川氏之奉還大政、蓋凜然于春秋大義、遂使尊攘諸臣竟其功、此陽明良知之說收其効也。往歲曾與老友吳摯甫京卿言之。摯老東游、拜德川氏家廟、爲長歌以詠歎之。及辛亥後、予避地扶桑、故父者舊每雖服膺儒術者尚不少、然後生多震驚于西洋物質文明、儒學亦稍々衰矣。今讀三島先生此記、深以内外交修望之清宮先生。復爲字號說、以親民之旨相敦勉。清宮先生必當能本諸師說、以先知先覺自任、俾以良知之說警當世、以復崇儒之舊。豈非其功將與明治維新諸臣比烈矣。謹企足以望之。己巳（昭和四年）一九二九、貞松羅振玉拜觀竝題記。（印記）「臣玉之印」「叔言」

⑥ 王樹枏の題記

方王文成公謫官龍場、瘴癘困厄、幾瀕於死。逮其撫南贛征西粵、戡難綏邊、勲業寫奕、若是。然公生平良知之學、實得力於謫居黔中時、而黔之文化惟公牖之、動心忍性之功與濟世利物之志、蓋險夷若壹節焉、宜黔人至今尸祝不忘也。日本清宮良齋先生游黔、奉公銅像以歸、而請其師三島中洲侍講爲之記。先生師弟皆服膺文成力行而不惑者、乃距公歿且數百年、竟獲展奉遺像於瀛海風濤萬里以外。豈公在天之靈爽實式憑之耶、抑心源遙接有曠世而放感者耶。及觀中洲題記、以内外交修勸良齋、謂不在公像之有與無。嗚呼其所見蓋侷乎遠矣。己巳（昭和四年）一九二九八月陶廬老人王樹枏識於遼瀋、時年七十有九。（印記）「新城王氏樹枏」「陶廬七十後作」

⑦ 吳廷燮の題記

明天順中、以銅範飾金孔子竝四配像一龕、置于文淵閣中間、示崇政本典至隆已。文成以忤璫謫龍場、當其時生死不自知、豈意後人之鑄爲像以昭其不朽。今清

宮先生得而寶之。是志文成之志、而必有以大光孔教也。

己巳（昭和四年）一九二九）季秋、吳廷燮題。（印記）「吳廷燮印」「向之」

⑧ 吳闈生の題記

陽明先生學問事功震鑠一代、日本得之以強其國。吾國得此大賢不自崇、奉坐視其學、發揚光大於鄰邦爲媿奚如。清宮先生持此冊屬題、瞻仰之餘、其穎有泚矣。

先公往年在東京、與三島侍講遊讌極歡、惟并無遊德川家廟及作長歌之事。羅君舛蘊所言殆是誤記。附志以存事實。

己巳（昭和四年）一九二九）初冬、桐城吳闈生記於遼東萃升書院講室。（印記）「吳闈生印」「北江」

⑨ 吳郁生の題記（用箋 紙本 ⑨⑩⑪一紙、H三九.五 五糎×一二六.八 糎）

（印記）「御賜景星照堂」
佛法有頓漸。尼山之言、博文約禮、下學上達而已、無頓悟之法。紫陽宗守之、故尊德性道問學竝進。金谿偏重尊性、陽明近之、提出良知二字爲教旨、近乎直指人心不立文字、殊塗同歸其理一也。當世之橫流、人心陷溺、驟語以格致、誠正格乎不入、則直揭其固有之良或可。憬然一悟、此在吾國亦球時之一道也。良齋君本中洲先生之教、確乎有得於心。余敬而愛之、增識數語奉正。時在辛未（昭和六年）一九三一）六月、鈍齋吳郁生。（印記）「鈍齋」

⑩ 王埏の題詩

良齋好古慕前賢 私淑陽明已有年 行過五溪瞻回像 步趨三島接心傳
淵源師友情何摯 香火因緣意倍虔 學術紛靡誰得挽 願君隨地廣眞詮
良齋先生雅正、辛未（昭和六年）一九三一）夏、王埏題。（印記）「萊陽王埏別號寄叟」「我生之初咸豐戊午」

⑪ 寶熙の題記

陽明學主知行合一。讀先生語錄云、以此純乎天理之心、發之事父便是孝、發之事君便是忠、發之交友治民便是信與仁。又曰知是行之始、行是知之成。此即中洲先生內外修之原也。清宮先生受學於中洲、服膺姚江拳々弗失。其於內外之際、固已深造、自得無少疑惑。展觀斯記、知其淵源有自來矣。

大同癸酉(二年) 昭和八年 一八九三(三) 仲春 長白寶熙題。(印記)「臣熙之印」

⑫ 胡嗣瑗の題詞(用箋 紙本 ⑫⑬一紙、H四五、六糎×W一三三、二糎)

是康陵輕倒太阿時、先生謫龍城、便崎嶇瘴國、儒冠非誤、獨破天荒、自古無文卉服、羅拜列門牆、俎豆千秋事、金鑄何妨。

我信神遊八表、況薪傳不盡、東暨扶桑、想驂鸞來去、山玉水環鄉、試回頭、兒時瞻詠、早不堪、剪伐到甘棠、今垂老、愧蓬壺侶、遙薰心香。

八聲甘州

清宮良齋爲中洲博士入室弟子、受姚江之學、光緒中來游我黔、爲學校講師歷八年。所獲王文成公銅範遺象歸、求其師爲之記。柳邊相見眎、余讀之、追往惜今、漫成此解。

康德二年(昭和九年) 一八九三(四) 三月、開州胡嗣瑗。(印記)「臣嗣瑗印」「未死深疑負國恩」

⑬ 鄭孝胥の題記

孟子所謂良能良知者、即性善之旨、世亂之極、乃以縱欲貪利爲良知良能矣。宗陽明者、何以救之。乙亥(昭和一〇年) 一八九三(五) 六月、書請良齋先生教正、孝胥。(印記)「夜起庵叟」

三島中洲撰「清宮宗親字號說」一卷(展示品7、H三九、〇糎×W九三二糎)

外題「三島侍講清宮字號說 辛未六月 叔文劉希淹題 淹 文叔」(H二五、四糎×W二、〇糎)

① 恭親王の題記(用箋 紙本 H三二、八糎×W八四、七糎)

(印記)「御賜忠賢人堅卓」

治世之道備在五經、而良知之說盛於陽明、實務本探源之論、而知其道者鮮矣。況今二十年來邪說詖辭充斥宇內、戕仁義喪廉恥、青年之人殆不知道義氣節爲何物、舉世滔々幾陷於禽獸之域矣。今何幸處海濱之僻、遇東國之人、乃以此卷屬予題識哉。卷爲舊友清宮良齋先生所有、是其師三島中洲先生所作字號記也。諷誦數回、憮然以難。試觀莽々中原、保良知之德充良知之用者、今幾人乎。然猶幸王道之未盡絕、尚有崇奉講論、如其師若弟者、是不禁感鳳晨星之感、而益傷知道者之鮮矣。用寫數語題而歸之。良齋其保之哉。

宣統庚午(昭和五年) 一八九三(〇) 夏至日、題於星浦山莊。恭親王并識。(印記)「錫晉齋印」「恭親王」

② 三島中洲の字號說(用箋 絹本 H三二、八糎×W九八、八糎)

字號說(印記)「黃薇人」

丙申(明治二九年) 一八九六(六) 秋、余挈門生清宮宗親遊浴于鹽原溫泉。一日宗親問其字號。余曰、宗族固可親、次之不可不親衆民。取之古本大學親民、請字曰民卿。而親民之本在明々德、明德即良知也、請號曰良齋。因顧鹽溪曰、此地噴靈泉治百疾、又奇巖名瀑以療騷人墨客烟霞疾。巨石大木以供建築之用、姬魚石斑魚以供割烹之具。豈非山水自然之良知哉。然往古人不知之、委棄於空山絕谷之間、猶人不知己有良知、自暴自棄者。近時世人稍知之、來遊者不絕迹、亦猶少發良知之能明德之光、然不過關東一方、余惜未擴充之天下也。

子猶年少學淺、雖知良知之德、僅用之宗族、而不知擴充之家國天下。子其勉旃。遂書以爲說。

東宮侍講三島毅撰。(印記)「三島毅字遠叔」「中洲漁韻」

③ 陳寶琛の題記(用箋 絹本 H三八・八糎×W一三・七糎)

(印記)「瓊林入瑞」

孟子言良知、以親々爲仁。達之天下、寔姚江之學所自昉。清宮君受王學於中洲先生、先生以其名宗親也、則取古本大學親民、字之曰民卿、而即號爲良齋。其淵源眞確、期許遠大舉、於所爲說見之。君於三十年前、嘗遊吾閩、未獲一晤。今乃邂逅新京、出兩卷屬題。既爲著其師弟授受之由、又有感於文字因緣之非淺矣。

壬申(昭和七年)一九三二仲冬、陳寶琛。(印記)「陳寶琛印」「歿庵八十後作」

④ 袁金鎧の題記(用箋 紙本 ④⑤⑥⑦⑧一紙、H三五・九糎×W一二九・八糎)

己巳(昭和四年)一九二九正月十八日、野口君持清宮先生所藏三島侍講字號說。本陽明之學、爲勗勉之意。文詞清古、書法高老、洵可寶貴。敬題數語歸之。潔珊袁金鎧。(印記)「袁金鎧印」「潔珊」

⑤ 羅振玉の題記

戊辰(昭和三年)一九二八仲冬予避地遼東、明年春始識清宮先生、挹其氣充然儒者心焉敬之、三數見乃知曾從三島中洲先生受陽明學。因出此卷屬題。文中以大學明德親民之旨相勗、知清宮先生所以持身立行之本源蓋有在也。方今東方大陸邪說橫行、甚于洪猛。惟扶桑三島尚能維持三千年之綱常名教、豈崇儒之効耶。謹書卷尾以識欽企。貞松羅振玉。(印記)「羅振玉印」「文學侍從」

⑥ 王樹枏の跋

昔昌黎韓子謂、孔子之道大而能博、門弟子不能徧觀而盡識也。故學焉而皆得其性之所近、後世程朱陸王立說攸殊、雖沈潛高明根於性之各有不同、至若修己治人躬行實踐、期無悖乎聖人之指、其揆一也。日本明治維新、諸賢多屬姚江學派、而我國有清咸同之際、如曾文正、羅忠節諸公芟夷禍難、厥功出於講學、又多奉程朱爲依歸、其明効大驗如此。晚近人心陷溺異說蠶起、欲盡擧吾國數千年來民彝物則之理摧滅無遺。於是泯々禁々莫可究詰、夫同一變法也。或以之躋盛強、或繇之益衰且亂、豈非學術陵夷之故哉。今觀日本清宮良齋出眎其師三島中洲侍講字號說、始知先生師若弟服膺姚江學說沉澁一氣。以良齋名宗親、故字之曰民卿、取大學明德親民之義。又謂明德即致良知、故號之曰良齋。其言原本經術、用意至深且遠。吾於是益歎、世之亂也、胥由德之不明民之不親、推其原、實始於良知汨沒馴致僻邪侈無所不爲。使人々能反躬自省、知萬物皆備於我、由一己以推薦諸家國天下、則郅治何難。吾既嘉良齋能篤守師說、爲東鄰士大夫所矜式、而又悲吾國當存亡絕續之交、安得有明道勵學如先生師若弟、其人者而一振起之乎。

己巳(昭和四年)一九二九八月既望、新城王樹枏跋。昔年七十有九。(印記)「王樹枏印」「晉卿」

⑦ 吳廷燮の題記

魏々姚江 先民知覺 治亂持危 勲業卓犖 我景清宮 篤耆厥學 服膺拳々 四國矩矱

己巳(昭和四年)一九二九季秋、吳廷燮題。(印記)「吳廷燮印」「向之」

⑧ 吳闈生の題記

闈生往年從先公至東京、三島侍講率其門下能文之士數十人結會歡迎、侍講與先公遊讌極歡、闈生亦蒙眷待、今忽々三十年。清宮先生出示此冊屬題。睽念

前蹤、泫然不知涕之落也。

桐城吳闔生識。(印記)「吳闔生印」「北江」

⑨ 吳郁生の題記 (⑨⑩一紙、H三四・〇糶×W一二八・〇糶)
(印記)「御賜景星照堂」

中洲先生宗陽明之爲學、爲東國大師。良齋君親承罄歎、奉杖從遊。讀此記、彷彿學沂風零胸次、洒然之氣象也、曷勝企仰。古人云、瞬有存息有養。良齋於此殆目擊而道存乎。

時辛未(昭和六年)一九三二夏六月、鈍叟吳郁生。(印記)「鈍齋」

⑩ 王埏の題詩

人生秉至性 所好在懿德 尼山決其奧 姚江悟其極 卓哉三島君 寢饋姚江學
本之以教授 語語皆精確 清宮列門墻 弟子之高足 篤信王文成 著志願私淑
因名而請字 用以作模楷 既字曰民卿 復號以良齋 姚江揭良知 績學富事功
究其所心得 只在孝與忠 良能本良知 初不待外求 清宮守師訓 拳々而服膺
我讀三島字號說、環顧中邦感不勝。

清宮良齋先生雅屬、辛未(昭和六年)一九三二六月、萊陽王埏題於青島。(印記)「埏印」「姑光東入」

⑪ 鄭孝胥の題記(用箋 紙本 ⑪⑫⑬一紙、H三八・八糶×W九四・〇糶)
孔孟所言、皆人已之學。陽明以良知立說、孟子謂良能良知、必證之愛親敬兄
推仁義以達天下。後世儒者務言心性遂入禪學、恐非孔孟之本旨也。清宮良
齋先生之屬、孝胥。(印記)「夜起庵叟」

⑫ 商衍瀛の題記

良知是人心本體、猶水之源木之本、千流萬派分枝布葉、皆從此出。大學由明

德而親民、先誠正而后平治、此姚江知行合一之說也。良齋先生、出其師三島
侍講名字說、屬題。侍講期於良齋者大、而良齋之自任亦匪輕。當此道德淪喪
之時、欲挽橫流、當從人自見本心始、則此卷實救時之導師也。

康德三年(昭和十一年)一九三六丙子春分日、商衍瀛題。(印記)「商衍瀛印」

⑬ 陳曾壽の題記

羅々山先生有云、危急時、跼得定方、是有用之學。此與陽明先生所云、千軍
萬馬仍是寂天寞地、同一宗旨、無所謂朱陸異同也。清宮先生于姚江之學有師
傳心得、出此屬題、敬識數語。

丙子(康德三年)昭和十一年一九三六三月、蒼虬陳曾壽。(印記)「陳曾
壽印」

IV 清宮宗親略年譜

西暦	和暦	年齢	事蹟
一八七六	明治9	(1)	清宮宗親、茨城県鹿島郡夏海村(現在の銚田市・大洗町)に父和惣治(神山村の菅谷兵八の二男)とつね夫婦の間の三男として出生。
一八九三	26	(18)	上京して二松学舎に学ぶ。
一八九六	29	(21)	7月〜9月、三島中洲が皇太子に扈從して日光と塩原温泉に滞在中、清宮は中洲に同行して詩稿の整理などの世話をする。
一八九七	30	(22)	6月6日神田錦輝館に学友会春期修睦会を兼ね陸軍軍人福島安正の遠征帰朝歓迎会開催。夏季休暇後、漢学塾二松学舎の会計係となる。
一八九九	32	(24)	漢学塾二松学舎の助教となる。
一九〇〇	33	(25)	1月より赤坂第三連隊下士官に漢文を教授する。
一九〇二	35	(27)	春、日本人教習として同僚木藤武彦と共に渡清。7月貴州省貴陽に到着。10月より武備学堂・師範学堂に教鞭を執る。
一九〇三	36	(28)	10月17日、鳥居龍蔵、人類学調査のために貴陽に至る。
一九〇四	37	(29)	2月雲南省に遊び雲貴総督の林紹年や雲南学政の呉魯に会う。3月貴州学政の趙惟熙と会う。貴州大学堂から日本に留学する周恭寿と交流。
一九〇七	40	(32)	8月修文泉龍岡山の陽明洞を高山公通・金子新太郎・岡山源六と共に訪ねて、洞穴壁面に文字を刻す。「龍岡山觀月記」を作って三島中洲に送る。
一九〇八	41	(33)	扶風山陽明祠の傍らに三島中洲詩碑を建碑、建碑者7名(高山公通、金子新太郎、愛甲猪之助、岡山源六、木藤武彦、岩原大三郎と清宮宗親)。
一九〇九	42	(34)	7月王陽明銅像を購入。
一九一〇	43	(35)	2月安順各地を遊歴。3月同僚岩原大三郎と共に離任帰国。柯邵恣、余誠格、呉嘉瑞、嚴雋熙、于德楷、李翰芬、倪惟欽ら送別詩文を贈る。
一九一一	44	(36)	この年、東京神田区宮本町一に居を構える。
一九一二	45	(37)	安東県大東溝の鴨緑江探木会社に勤務。3月28日安東県在住の二松学舎同学、野口多内・大山格司・久山順平・高橋止観・稲川容道と同窓会を開く。
一九一三	大2	(38)	この年旧水戸藩士武熊氏の女を娶る。
一九一五	4	(40)	2月長女安子(三島中洲の命名にかかる)出生。11月帰国。
一九一七	6	(42)	5月渡満して旅順の関東庁都督府に通訳官として勤務。この年、呉郁生と知り合う。
一九二三	12	(48)	青島守備軍司令部(司令官神尾光臣)に転属。
一九二六	15	(51)	中華民国政府から通訳官としての勤務に対して六等嘉禾章を贈られる。5月、馮国璋より写真を贈られる。
一九二九	昭4	(54)	関東軍参謀部附となって北京に転任。貴州時代の旧知周恭寿に再会。
一九三〇	5	(55)	樂嘉藻と再会。劉文龍、陳筑山、毛邦偉、符詩楷等とも交流。
一九三一	6	(56)	三島中洲撰「王文成公銅像記」、同撰「字号説」について諸家に題跋を求め、袁金鑑、羅振玉、王樹枏、呉廷燮、呉闔生が揮毫。
一九三二	7	(57)	夏、恭親王が「王文成公銅像記」「字号説」に揮毫。冬、書画帖『万花苑』に張福増・閻錫山・宝熙が揮毫。
一九三三	8	(58)	呉郁生と王埈が「王文成公銅像記」「字号説」に揮毫。6月23日書画帖『翰墨因縁』に呉郁生が揮毫。
一九三五	10	(60)	満洲国建国、宮内府に繙訳官として勤務。7月12日書画帖『万花苑』に後藤朝太郎が揮毫。11月陳宝琛が「王文成公銅像記」と「字号説」に揮毫。
一九三六	11	(61)	2月宝熙が「王文成公銅像記」「字号説」に揮毫。
一九三七	12	(61)	満洲国の帝室大典委員会嘱託、宮内府一等翻譯官となる。胃癌を患い、一時帰国療養。 2月24日満洲に渡る。3月25日新京の満鉄病院に病没。3月29日告別式が執り行われる。 3月14日、二松学舎において富田健助・山田謙吉とともに清宮の追悼会開催。

参考資料

- ・『二松学友会誌』一八九六〜一九一九年。
- ・『中洲会誌』八号、一九三七年。
- ・横須賀司久『漢詩人列伝』五月書房、一九九七年。
- ・中村義「三島中洲の対外認識―攘夷論・アジア主義・華夷秩序と関連して」『三島中洲の学芸とその生涯』、一九九九年、雄山閣出版。
- ・菊池誠一「三島中洲の中国詩碑とその周辺事情」『陽明学』一三三号、二松学舎大学、二〇〇一年。
- ・石田肇「貴州省の日本人教習と陽明祠の三島中洲詩碑―附、三島中洲と黎庶昌」『駒沢史学』六四号、二〇〇五年。
- ・佐藤守男「日本陸軍情報将校と辛亥革命―一八七七〜一九二二」『北大法学論集』六〇―一、二〇〇九年。
- ・中村義・藤井昇三・久保田文次・陶徳民・町泉寿郎・川邊雄大編『近代日中関係史人名辞典』、二〇一〇年、東京堂出版。
- ・白井順「西村天囚の門人・岡山源六―その中国貴陽時代を中心に―」、『懷徳』八七号、懷徳堂記念会、二〇一九年。
- ・町泉寿郎「三島中洲と漢学塾二松学舎から見た東アジアの近代」『南岳百年祭』記念論文集』関西大学東西学術研究所、二〇二一年。
- ・町泉寿郎「資料紹介清宮宗親の事蹟とその旧蔵の陽明学関係資料―王陽明銅像と三島中洲撰の王文成公銅像記、および清宮宗親字号説―」『陽明学』三三三号、二松学舎大学東アジア学術総合研究所、二〇二三年。

編集後記

まずは、貴重な家伝資料をご寄贈いただいた清宮宗親のご子孫の皆様
厚く御礼申し上げます。漢学塾二松学舎の出身者に中国・台湾・朝鮮など
外地で活動した人々が少なくないことは、これまでも知られていましたが、
具体的な資料が出現したことによって判明する事実も少なくないと感じて
います。長く中国大陸で活動した清宮宗親と三島中洲の親密な師弟関係に
ついては本図録において紹介した通りですが、多くの門人を擁した三島中洲が、各地各分野で
活動する門人知友を通して知る国内外の各領域にわたる人脈や情報は相当のものであったに違
いありません。従来、近代漢学者群像における三島中洲像は、必ずしも同時代の海外情報に明
るい人物というイメージはなかったと思いますが、その中洲にしてこれほどの人脈や情報を
持っていたことは、近代漢学者をとらえ直す上で極めて示唆的であるように感じています。

今回の展示に合わせて、来る一〇月二八日(土)に、シンポジウム「転換期における東アジ
ア文化交流と漢学」(東アジア学術総合研究所日本漢学研究センター主催)を企画しました。清
宮宗親が残した近代中国書画をはじめとする資料を広く紹介するとともに、激動する東アジア
情勢のなかで我々の先人たちがどのように生き、どのような文化的交流をしていたかを知り、
過去の人々の営為を具体的に検証することを通して、今を生きる糧を得る機会としたいと考え
るものです。

(町 泉寿郎)

三島中洲と近代 其九

二松学舎に学び中国大陸で活動した人たち

―新収の清宮宗親資料から―

発行日 令和五年一〇月一三日

編集者 大学資料展示室運営委員会

発行者 二松学舎大学附属図書館

〒一〇二―八三三六

東京都千代田区三番町六一―一六

印刷
製本
株式会社 サンセイ

學堂十年學科庶幾飛一旦風會舒為來
待汝為吾語未見江山未見書

明治壬寅春送清宮氏鄉遊函

老沙東宮侍講三島毅

